

令和5年度(戦後78年)

習志野市 平和市民代表団
長崎派遣報告書

未来へ平和を語り継ぐ” 27



習志野市

長崎派遣についての報告は

32ページからご覧ください。

目 次

核兵器廃絶平和都市宣言と習志野市の平和活動推進事業	1
令和5年度習志野市平和市民代表団名簿	2
令和5年度習志野市平和市民代表団活動の記録	3

－事前学習会－

第1回事前学習会	5
第2回事前学習会	5
第3回事前学習会	26
平和祈念原爆展および 『ヒロシマ』・『ナガサキ』を繰り返さないための被爆体験の語りとビデオ上映	30

－写真で綴る 長崎訪問－

8月24日	32
8月25日	36
池田道明さんによる被爆体験講話	38

－長崎派遣を終えて－

長崎派遣の感想	
団長 齋藤 路子 *皆さんが地球を守っていただきたい	43
団員 秋本 大樹 *許しの連鎖	44
団員 土岐 光喜 *「平和」とは	45
団員 佐々木 耀久 *長崎派遣を終えて	46
団員 木村 悠成 *平和への扉	47
団員 川向 羽菜 *派遣を終えて	48
団員 豊沢 咲奈 *派遣を終えて	49
団員 古屋 陽輝 *長崎と核兵器の爪痕	50
団員 恩田 智己 *長崎派遣を通して	51
団員 細山 雅喜 *人と核は共存できない。	52
団員 松尾 悠大 *長崎派遣報告書	53
平和な未来をつくるために、私たちはなにができるのか？	54
派遣先で学んだことについての各団員によるまとめ	55
令和5年度習志野市平和市民代表団 派遣後の活動	59

－長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典 資料－

長崎平和宣言	62
平和への誓い	64

－参考資料－

習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典	67
習志野市平和市民代表団OB・OGによるスピーチ、詩の朗読文	68
習志野市平和市民代表団OB・OGの活動	72
習志野市平和事業のあゆみ	74

核兵器廃絶平和都市宣言と習志野市の平和活動推進事業

平和は市民の安全な生活の基本であり、市民一人ひとりに支えられて実現するものとの認識に立ち、習志野市は、昭和57年8月5日、県内では初めて「核兵器廃絶平和都市」を宣言しました。

戦後50年の平成7年には、永遠に平和事業が引き継がれるような財産基盤となる平和基金を設置し、広島市・長崎市平和式典への市民派遣事業を開始しました。

また、毎年8月6日と9日の広島・長崎原爆の日には、新習志野公民館並びに秋津公園内「平和の広場」で平和祈念式典及び献花を行い、原爆犠牲者を追悼し、再び地上にその惨禍が繰り返されることのないよう、平和実現への誓いを新たにしています。

核兵器廃絶平和都市宣言

わたくしたち習志野市民は、文教住宅都市憲章を定め、生存と安全をまちづくりの基本とした。

わたくしたち習志野市民は、我が国が世界唯一の核被爆国として被爆の恐ろしさと、被爆者の苦しみを全世界の人々に訴え続けるとともに、再び地球上に広島、長崎の、あの惨禍が繰り返されることのないよう、恒久平和を強く願うものである。

わたくしたち習志野市民は、非核三原則の完全実施を願い、平和を愛する世界の人々と共に、恒久平和を実現することを決意し、核兵器廃絶平和都市をここに宣言する。

昭和57年8月5日 宣言

◆ 習志野市平和市民代表団 広島市・長崎市平和式典派遣事業について

★事業の目的★

戦争を知らない若い世代が、広島市・長崎市平和式典への参列や、原爆資料館等被爆関連施設の見学を通じて、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを知り、派遣体験を活かして次世代への継承・平和啓発に貢献してもらうことを目的とする。

★団員の選出★

中学生	7名
高校生	2名
中学校教諭	1名
習志野市原爆	
被爆者の会会員	1名
計	11名

中学生・中学校教諭は市立中学校から、高校生は市内高等学校から、各学校長・教育委員会等より推薦を得て決定する。
また、団員の他、市職員が1名同行する。

★団員の任務★

- 結団式、事前学習会、報告会等に参加
- 広島市・長崎市で開催される平和式典へ参列
- 派遣終了後、感想や記録等をまとめ、報告書を作成
- 学校、家庭、地域等において自らの経験を伝承
- 習志野市平和基金募金活動への協力

令和5年度習志野市平和市民代表団名簿

団 長	さいとう 齋藤	みちこ 路子	(習志野市原爆被爆者の会・会員)
団 員	あきもと 秋本	たいじゅ 大樹	(習志野市立第一中学校・教諭)
団 員	と き 土岐	みつ き 光喜	(習志野市立第一中学校・第3学年)
団 員	さ さ き 佐々木	よう く 耀久	(習志野市立第二中学校・第3学年)
団 員	きむら 木村	ゆうせい 悠成	(習志野市立第三中学校・第3学年)
団 員	かわむこう 川向	はな 羽菜	(習志野市立第四中学校・第3学年)
団 員	とよさわ 豊沢	さな 咲奈	(習志野市立第五中学校・第3学年)
団 員	ふるや 古屋	はるき 陽輝	(習志野市立第六中学校・第3学年)
団 員	おんた 恩田	ともき 智己	(習志野市立第七中学校・第3学年)
団 員	ほそやま 細山	まさき 雅喜	(千葉県立津田沼高等学校・第2学年)
団 員	まつお 松尾	ゆうだい 悠大	(習志野市立習志野高等学校・第2学年)
同行職員	みどりかわ 緑川	しずえ 静栄	(協働政策課)

【長崎 平和公園内 平和の泉前にて】



右から
齋藤団長
川向団員
豊沢団員
土岐団員
古屋団員
木村団員
佐々木団員
細山団員
恩田団員
松尾団員
秋本団員

令和5年度習志野市平和市民代表団活動の記録



5月30日(火) 結団式及び第1回事前学習会

- 市長、教育長との歓談
- 派遣事業の概要説明
 - 派遣に伴う活動等の確認
 - 学習テーマの決定

7月20日(木) 第2回事前学習会

- 事前学習
 - 団長による被爆体験講話
 - 学習テーマの発表
 - 視聴した証言ビデオのレポート発表
 - 派遣に向けて抱負や思い等の発表
 - 千羽鶴作成



7月25日(火) 平和の広場清掃活動及び第3回事前学習会

- 清掃ボランティアに参加
- 事前学習
 - 「私たちにできることがあるのだろうか」発表
 - 派遣日程等の最終確認

8月6日(日) 習志野市平和祈念式典(広島)

- 習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典に参列

8月9日(水) 習志野市平和祈念式典(長崎)

- 習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典に参列

8月10日(木) 平和祈念原爆展および『ヒロシマ』・『ナガサキ』を繰り返さないための被爆体験の語りとビデオ上映

8月24日(木)～8月25日(金) 長崎市訪問

- 平和関連施設の見学
- 被爆体験講話

8月30日(水) 報告会

- 「平和な未来をつくるために我々はなにができるのだろうか」発表
- 今後の取り組みについて



10月29日(日) 福祉ふれあいまつり

- 平和基金募金活動
- 長崎派遣報告発表

11月11日(土)・12日(日) 食とくらしの祭典

- 平和基金募金活動
- 長崎派遣報告発表(パネル展示)



3月14日(木) 解団式(予定)

事前学習会



— 派遣への準備 —

◎第1回事前学習会

派遣の概要を説明し、長崎について学ぶため「学習テーマ」を決めました。

◎第2回事前学習会

団員たちはそれぞれ調べたことを発表し、知識を深めました。

『抱負』

派遣に向けて、各自の思いを発表し語りました。

齋藤 路子 団長

私の母は、長崎の長崎高等商業学校(旧制専門学校)現在の長崎大学経済学部で被爆しました。戦後、自宅は軍に没収されてしまったので、母の両親の故郷である鹿児島に帰りました。結婚し、子どもを4人もうけましたが、当時は原爆症のことは、誰も知らなかったようで、いつも疲れてゴロゴロしている母を見て近所のおばさんたちに、「おまえのお母ちゃんは、なまけもんだな」と私たちは言われていました。私の進学に合わせて川崎に移り住み被爆者の会に出会った母は、被爆者の救援運動に取り組み、病を押して国会前の抗議活動にも参加していたようです。



高校生への語り部や、被爆体験証言集などに積極的に取り組んでいましたが、生涯を病との闘いで亡くなりました。結局、被爆体験を聞けないままのお別れでした。

私は、2018年「被爆体験朗読者養成講座」を受講いたしました。この講座で、被爆体験や、核兵器の脅威などについて学ぶうちに「母の被爆体験に向きあって来なかった後悔」があり、今からでも向き合おうと思いました。

母の遺品の中に4冊の原爆に関する本や証言集がありました。母の証言の中にある「黄泉の国をさまよっているような錯覚に陥った」「子孫のため、現在の平和を死にもの狂いで守り抜きたい」との願いを引き継ぐためにも、今回いただいた「習志野市平和市民代表団」の一員として、参加なさる生徒さんたちと一緒に原爆で残された、遺構や原爆資料館に展示された、遺品等を見、聞いて当時の惨状を語り合いたと思います。

母が、被爆直後に友人、知人を探して長崎を歩いた体験は、今後私が母の証言をもとにして伝えて行きたい。今回、いただいた機会を生かし、核のない、戦争のない日が、本当の平和が世界中に来る日を求めて。

秋本 大樹 団員

私は13年前、習志野市立第一中学校の生徒であり、平成22年度平和市民代表団として広島に派遣をしていただきました。13年前の体験を今でも鮮明に思い出すことができます。それまでは私にとっての戦争や原爆の悲惨さはただの“物語”でした。ただ、被爆者の方の話、原爆に関する詩の朗読会、平和祈念式典の参加や平和記念資料館の見学等、たくさんの活動を通して、“物語”は“経験”に変わりました。



現在、私は母校で社会科の教員として日々授業をしています。13年前の“経験”を子どもたちに授業を通して伝えるという、平和市民代表団員としての務めをさせていただいております。どのような巡り合わせなのか、今年度、教員の立場で再び平和市民代表団として今度は長崎に派遣していただけることを大変うれしく思います。中学生の時より多面的・多角的に物事を捉えられるようになり、教わる立場から教える立場になった今だからこそその視点で改めて平和について学び、考えるこの機会を大切にしていきたいです。

そして、今回から団員が増え、大きな団体での活動になります。自分が学ぶのはもちろんのこと、中学生・高校生のみなさんにとって少しでもより良い経験ができるよう、全力でサポートしていきます。

私の今回の派遣に対する個人的なテーマは「繋ぐ」です。1回目の記憶と今回の活動を繋ぐ。団員と平和への学びを繋ぐ。今回の派遣での経験を学校にいる人へ繋ぐ。そして、自分の平和への想いを未来へ繋ぐ。終戦から78年が経ち、戦争がフィクションのようになりつつある今だからこそ、インターネットで得られる知識から飛び出した平和に関する経験が必要だと思っています。15万人の被爆者の苦しみが数字だけで終わらないような深みのある学びをして参ります。よろしくお願いいたします。

土岐 光喜 団員

私にとって「戦争」や「原爆」というものは、教科書や本で出会う「歴史」の一部で、とても遠い存在に感じていました。「平和」はあたりまえであり、いつまでも続く永遠のものであると思っていました。しかし、今回このような機会をいただいて、さまざま調べていく中で、それはとてももろく、あたりまえではないことに気づかされました。昔の人たちの「平和」への強い思いと努力のおかげで、今の平和な日本があるのだと知りました。彼らに感謝するとともに、私たちはどうしたら、先人の努力の結晶である「平和」を守るのかを考えなくてはならないと強く思いました。



今回の貴重な機会を最大限活かして、一発の原子爆弾でどれくらいの被害が出たのか、また戦争や原爆の悲惨さ、恐ろしさ、なぜ原爆は落とされてしまったのかなど、「戦争」「原爆」についてももっともっと詳しく知り、考えを深められるようにしたいです。そして、自分が長崎で学んだことや、今の平和な社会のありがたさを、たくさんの人たちに伝えて、一人でも多くの人たちに「平和」について考えてもらえるようにしたいです。

佐々木 耀久 団員

今回、習志野市平和市民代表団の一員として長崎派遣に参加する機会をいただき、とてもありがたく感じています。

この長崎派遣では、なぜ原爆が落とされたのか、原爆による被害、原爆の悲惨さ、私たちが普段身近に感じるこのできないものについて感じ取り、「平和」とは何か、また、「平和」の大切さについて学び、様々な場所へ発信していきたいと思っています。

私たちは今、あたりまえのように戦争の無い国で暮らしています。しかし、全ての国が同じ状況なわけではありません。この国が、この先も戦争の無い国であるために、世界から少しでも戦争が無くなり、「平和」への意識が高くなるように、習志野市の代表である自覚を持って、平和活動に積極的に参加していきたいと思っています。平和のために、私たちにできることを精一杯していきたいです。



木村 悠成 団員

今回、習志野市平和市民代表団の一員として、長崎派遣に参加できることを、とても嬉しく思っています。このような機会はめったにないと思うので、長崎の人が原爆についてどのように思っているのか、実際に行くことでこの目や耳などで感じとっていききたいと思っています。そのためにも平和祈念式典などの長崎での活動に積極的に取り組み、少しでも多くの情報を得て、自分の学んだことを共有し、原爆や戦争の恐ろしさ、平和の素晴らしさを痛感してもらえるように行動していきたいと思っています。

僕は、実際に戦争を体験していないので、どのような状態になってしまったのかわかりません。しかし、戦争によってたくさんの人の命が失われたということは知っています。命の尊さを共に学び、戦争の実態についても知っていききたいと思っています。

日本は平和な国としてよく耳にするけれど、昔から平和だったのかというと、そういうわけでもなく、様々なことを乗り越えて今がある国なので、そういう意味でも、大きな転換点となった原爆投下についてより深く学習していきたいと思っています。

戦争は、今現在でも続いていて、最近では、ロシアのウクライナへの侵攻で再び罪のない人たちが殺されていて、ロシアは核でも世界を脅しているのです。僕達は直接訴えることはできないけれど、少しでも戦争はしてはいけないということを広めていけたらなと思います。

自分のやることに責任を持ち、習志野市の代表という自覚をもって、自分のためだけでなく、他の人や未来の人達のためにたくさん勉強できたらいいなと思っています。そして、平和について今一度考え直していきたいと思っています。



川向 羽菜 団員

今回、習志野市平和市民代表団の一員となり長崎への派遣や平和式典の参列など貴重な経験ができることを、とてもうれしく思います。

長崎への派遣にあたって、戦争の悲惨さや当たり前の平和のありがたさについてよく考えたいと思いました。

私たちは戦争を経験したことがありません。そのため、想像し考えることはできても本当の意味で、戦争がどれほど大変で残酷なものだったのかを知ることはできません。

しかし、私たちは戦争の残酷さや何が起こったのか、被害にあったものや、当時の資料を見たり、戦争を経験した人たちの話を聞いたりすることで、戦争を知らない人全員が戦争という場で起こった事実を知り、もう二度と戦争が起こらないように考え伝え続けるべきだと思います。

日本は世界唯一の原爆の被爆国です。原爆を経験した日本にしかわからない、原爆の危険さや脅かされる日常についても、学び伝えられるようにします。

市の代表として経験し、新しく得た知識を周りの人に伝えるために、一つでも多くのことを学び考えていこうと思います。



豊沢 咲奈 団員

今回、習志野市平和市民代表団として長崎平和祈念式典に参列できること、とても嬉しく思います。このような貴重な経験をさせていただくからは、教科書上では学ぶことのできない原爆や戦争の恐ろしさなど、当時の様子の理解をより深めていきたいです。そして、自分が知ったことや学んだことを家族や友人に伝え、普通の日常の尊さを広めていきたいです。

今年は、被爆そして終戦から78年となります。中学生である私たちは戦争も原爆も実際に経験したことはありません。毎日学校に行き、授業を受け、友達と遊ぶ。私にとっては当たり前の日々ですが、世界的そして歴史的にみたととき、普通ではないことがわかります。

また、当時の原爆投下の予定地として①広島②小倉③新潟④長崎の4つが候補とされ、その日天候のよかった広島と長崎に投下されたそうです。これにより日常は一瞬で奪われ、たくさんの方が亡くなりました。このことから日本は唯一の被爆国として戦争の悲惨さや平和の尊さを伝承し、記録を残していく必要があると思います。だからこそ、これからの活動に全力で取り組み、平和に対する自分の考えを深めていきたいです。



古屋 陽輝 団員

今回、習志野市平和市民代表団の一員として、長崎派遣をさせてもらえることをとても嬉しく思っています。

私は身近に原爆の恐ろしさを実感できる事が少なく、長崎に投下された原子爆弾がどのような規模の被害を出したのかを想像すらできませんでした。長崎の出発を前にして調べては見たものの、現実味がわかないのが正直な感想です。ですが、今回の長崎派遣を通して、まずは私自身が原爆がどれほど恐ろしいものなのかを知り、その恐ろしさを多くの人達に伝える意義があると思っています。なぜ核兵器はだめなのか、どれほどの被害や、人を悲しみのどん底へおとし入れるのかを伝える必要があるのではないかと強く思っています。

誰でも長崎派遣に参加することができるわけではないので、貴重な体験をムダにすることなく、多くのことを学び入れる重要な機会へ参加させて頂くことに感謝しています。



恩田 智己 団員

僕が中学1年生だった時、原子爆弾の被害者の方が来てくださり、戦争や核兵器の恐ろしさ、その時の思いなどについて話していただきました。その方のお話を聞き、その恐ろしさに衝撃を受けました。

僕は、戦争を実際に体験していません。その時の風景や背景、被害者の不安や恐怖の思い、それらは正しくは分かりません。しかし、被害者の話を聞き、当時の写真を見ることで、当時の状態や被害者たちの思い、そして今後の願いを知ることは出来ます。

今の日本には戦争がなく、戦争は私たちの生活とかけ離れたものになっています。しかし、世界を見てみるとウクライナ戦争をはじめ、いろいろな国々で紛争などの問題があります。僕は、今なぜ日本には戦争がなく平和なのか、戦争とはどれほど残酷で恐ろしいのかを知りたいと思い、長崎派遣に立候補しました。また、そこで得た経験を学校や家族、地域の人など、身近な人に知ってもらえるように精一杯頑張ります。よろしくお願ひします。



細山 雅喜 団員

僕は小学5年生の時に観光として長崎に行き、そこで初めて原爆というものの恐ろしさを知りました。そして今、習志野市平和市民代表団の一員として長崎派遣に参加できることを大変ありがたく、また嬉しく思います。



今回の派遣について自分の中で一つ大きな目標を立てています。それは、「教科書以上に」というものです。つまり、教科書やネットにある情報だけでは全てを知る事はできないと思っています。だからこそ、現地に行き自分の目を見た物、耳で聴いた事、心で感じた事、その全てを戦争の事を知らない世代にも伝わるように言葉や形として残し、いかに戦争が、そして核が存在してはならないものなのかを示すということです。

なので、この派遣で現地の今と過去の変わったところや変えてはいけなところや被爆者の声を大切にしていこうと思います。

長くて短いような1年間ですが、学生最年長として今後の活動で率先して動き、頼れる存在になれるよう精一杯努めてまいります。よろしくをお願いします。

松尾 悠大 団員

習志野高校にこの長崎派遣の話がきたときに、少し興味をもっていたので立候補し、参加させていただくことになりました。



去年ウクライナで戦争があったことをインターネットやテレビを通して知り、今まで戦争は昔のことで、私の生活とは遠い存在だと思っていました。ですが、今まで戦争が起こっている現状を知り、戦争についてもう少し詳しく知りたいと思いました。

学校の代表として長崎に行かせていただくのでしっかり原爆のことを知り、学校に戻り、アウトプットしたいと思います。

事前学習として、長崎の原爆のことについて調べていると、私が思っていた以上に、被害が大きかったことに気づきました。調べていくうちに今の私の生活があたりまえではなく、とても幸せなことなのだと思います。長崎に行き、正しい情報を知り、この戦争を未来世代に伝え、二度と繰り返さないようにしなくてはなりません。

長崎の平和公園は、中央に巨大なブロンズ像があるらしく、右手には原爆を示し、左手には平和を、顔は戦争犠牲者の冥福を折るという意味があるそうです。

また、平和公園には噴水があり、被爆者の霊に捧げられた平和の泉という意味があり、単なる噴水と思っている人が多いですが深い意味があります。そのような意味を理解してから平和公園に行きたいと思います。

長崎の平和公園を訪問する際には、被災者への敬意を忘れずに、平和の尊さを感じながら意義のある時間を過ごしていきたいと思っています。被爆者の声をきくことのできることも貴重な体験をすることができるので、この貴重な体験をこれからの生活に生かしていきたいです。

『被爆者の声』を聞く

インターネット上で公開されている『被爆者の声』より、各自で被爆証言映像を視聴し、被爆者の方の被爆証言内容と感想を事前学習会で発表しました。

齋藤 路子 団長

証言者 田川 博康 さん(被爆時12歳)

証言内容

1933年生まれ被爆当時は、新興善国民学校(現在は、図書館になっている)6年生。当時、木造家屋は火事になると、強制疎開で家族バラバラの生活だった。8月9日は、夏休み中で新興善国民学校の近くの自宅で被爆。浦上に住んでいた両親を探している途中、黒いベトベトした雨、墨化して折り重なる死体、異常である。探しあてた父親は片足切断、無傷であった母親も死亡。原爆が落ちた直後というのは、まさに惨状。原爆の後は混乱。もし両親が生きていたら悲観的なことばかりでしたが、それが財産かもと被爆を逆手に取らないと生きてこれなかった。将来を担う若い人たちが「平和」が一番大事だということをきちっと自分の価値観の中心に据え、一人ひとりが素晴らしい民主国家を作るよう頑張ってもらいたい。

感想

被爆直後の12歳の少年の不安、怖さはどんなだったろうと思いました。被爆後、父親が迎えに来てくれると思いついていても来ない。当時は何の情報もなく、11日にやっと浦上方面から来た方から、「浦上の町はない」と言われ、12日に両親を探し当てるまでの道中の証言は、バックの映像と重なり、公共交通機関なんて何もなく、長崎駅の所まで歩いて行ったら建物は中町天主堂だけだった。駅辺りに行ったら電車は壊れて死体が折り重なっている、もう異常。初めてあんな死体を見た。そして、三菱製鋼所という製鋼所前の小さな川に死体がたくさん浮いていて、何人かの大人が竹竿でひっくり返しながらか、「違う違う」って探していたという。私には、想像もつかない惨状でしたが、両親の死を乗り越えられ、「生きていくために被爆を逆手に取らないと生きてこれなかった」というお言葉、語り部としてのご活躍に田川さんの強さを感じました。

原爆の日に合わせての「原爆の展示」が巡回します。怖い、気持ち悪いという見学者もありますが、現実にあったこととし、そして今でも戦争が行われていることに目を背けることなく見てほしい。今の平和が、先人たちの泣くような、そして戦地に赴き生き帰って、命を削るような思いで、復興されたからこそであるということを考えてほしいと思います。そのためには、私たち一人一人が、家族、友人等と仲良く、皆、平等である世界を目指していけたらと強く望みます。地球はひとつ。

秋本 大樹 団員

証言者 市場 元喜 さん(被爆時14歳)

証言内容

師範学校に通っていた市場元喜さんは音楽室で被爆しました。その後、防空壕に避難しようとしたのですが、中は人で埋め尽くされているため、周辺の山にある芋畑に身を潜めていました。その後、夜にアメリカの撮影機が落とした照明弾が原爆よりも怖かったようです。次の日、校庭で被爆し、大きなけがを負った同級生の山口君を列車に載せるために学校から運んでいる最中、飛んできた航空機に恐れをなして山口君を置き去りに道端に避難してしまったという体験をしています。

感想

市場さんの証言から、いかに原爆が市場さんの心に大きな不安を残したかがわかりました。照明弾に対する恐怖、落ちていた戦闘帽や靴を拾ったこと、そして同級生を道の真ん中に置き去りにしてしまったこと。すべてに共通するのは「原爆に対する大きな不安」です。特に、山口君を置き去りにしてしまったエピソードを聞いて、胸が痛くなりました。自分の身を最優先にし、同級生を見捨てるような行為を恥じているような話でしたが、仕方がないように思います。しかし、戦争が終わって長い年月を経た後でも、友人を見捨てたことに対する罪悪感が残ってしまっているのだと思うと、原爆が人々に与える恐怖が実に多岐にわたるものであると感じました。原爆の苦しみと聞くと、放射能の被害や火傷をはじめとする身体の負傷や、家族や友人を失う悲しみが連想されますが、それ以外にもこのような苦しみがあることを知り、人の数だけ苦しみがあることがわかりました。その点で、このような被爆者の声を集めたウェブサイトがあることは本当にありがたいことだと思いますので、引き続き、他の方の証言からも学ぼうと思います。

土岐 光喜 団員

証言者 谷口 稜嘩 さん(被爆時16歳)

証言内容

本博多郵便局配達課の局員として勤務中に、爆心地から1.8km地点で被爆。乗っていた自転車もろともふっとばされる。あつというまの出来事で混乱しながらも、地面に必死にへばりついていて。背中が焼けただけ、左手の皮膚は垂れ下がった。血が出ず、痛みも感じないほどの重傷だったが、歩いて避難。

翌10日には立ち上がることができず、水を求めて腹ばいで民家の水道に移動。その後、避難所や病院を転々とし、約2年間自力で起き上がれなかった。

感想

当時を振り返るように、淡々と言葉一つひとつを大切に話されるお姿から、「戦争を二度と繰り返してはならない」という谷口さんの思いがひしひしと伝わってきました。私は、被爆直後には歩いて避難することが出来たのに、やがて立ち上がれなくなったというお話が印象に残りました。腹ばいになっても進まなければ死んでしまうという状況から、当時の悲惨さがわかります。また、原爆とは直接関係のないことなのですが、「空襲警報が鳴っていても、さほど驚かなかったし、通常通り、仕事をしていた」というお話にとっても驚きました。当時は、それほど「戦争」や「人が死ぬこと」が常態化していたのだと考えるととても恐ろしいです。終わりに谷口さんが話された、「戦争は二度と繰り返してはならない」という言葉は、非常に重みのあるもので、心に深く残りました。

今回の長崎派遣を通して、さらに当時の様子を深く知り、今の、当たり前ではない「平和」の尊さを学んで、谷口さんのような「戦争被害者」を二度と生まないためには、どうすればよいのかを考えていきたいです。

佐々木 耀久 団員

証言者 井上 秀雄 さん(被爆時20歳)

証言内容

長崎市、三菱造船立神ドックの船内にて被爆。爆風は受けなかったが、光線をあびた。陸上の防空壕に逃げ込んだが、工場がやけに静かだったので、外へ出た。夕方、被爆者を見たが、ヒフがただれてぶら下がって、まるでおぼけだった。8月15日の放送を流したら、他の国のスパイではないかと海軍の兵隊にうたがわれた。歯ぐきからの出血が3、4年間続いた。

感想

このビデオを見て、井上さんはあたりまえのように、空襲や原爆投下時のことをお話しされていましたが、それは井上さんの身の周りであたりまえのように戦争が起きていることだったのではないかと思います、とても恐怖を感じました。

私たちに、空襲や原爆の怖さは想像することしかできませんが、当時の様子や、被爆した方のことなどがとてもリアルに語られており、直接爆風を受けなくても光線をあびただけで歯ぐきからの出血が数年続き、直接受けた方々は多くの方が亡くなられたという、原爆の悲惨さを改めて認識し、もう二度とどこにも落とされてはならないと改めて感じました。

木村 悠成 団員

証言者 篠原 博 さん(被爆時25歳)

証言内容

高射部隊へ配属され、電測(レーダー)を担当、所用で部隊事務所へ赴く途中で被爆。

北西の方向にゆらゆらと何か小さい物が落ちていくのが見えた。ずっと見ても仕方がないため、踵を返そうとしたところ、稲佐山辺りから光がでてきて、木々の葉っぱが赤く見えた。爆風でメガネが吹っ飛び、探す時に再び爆風で転んでしまった。建物の窓ガラスは全て割れ、書類は上に舞い上がった。

また、水がなく、ボウフラの湧いた水を飲んだ者もいた。

玉音放送が流れた時は、デマと思う人もいた。

感想

この被爆証言ビデオを観て、原爆の悲惨さ、残酷さを改めて感じました。篠原さんは、死は免れましたが、その後も被爆の影響で白血球の体内の数値が下がるなどの体へのダメージも出始め、それが子ども・孫へと継がれてしまうということにもなってしまい、大変なのは被爆時だけではないのだなと思いました。被爆後・戦後直後の衛生環境は、今と比べものにならないほど悪く、戦争の与えるダメージはものすごいなと感じました。

また、篠原さんは今後の核兵器について、アメリカとソ連(ロシア)が核を手放すことはないと言っており、現在もロシアがウクライナに侵攻し、いつでも核兵器が打てる状態になっています。

さらに、核を持っていれば睨みがきくと語っており、実際冷戦などでアメリカとロシアは対立関係になっていて、このようなことがあるから「核」というものは地球上からなくなると話していました。

僕たちは、篠原さんのような体験をした人の話を次の世代の人々に伝えることが重要だと思います。そして、再び原子爆弾がこの地球上に落ちないように強く願います。

川向 羽菜 団員

証言者 榎林 美枝子 さん(被爆時22歳)

証言内容

自分が見ているところに爆弾が落ちたと錯覚するほど大きな爆発で2、3秒たつと大きな音が鳴り屋根や家が吹き飛ばされていた。家族とともに家をでた先で見たのは「地獄」。家だけではなく、全身をやけどした10歳ほどの男の子が「おかあさん！」と泣きながら走っていた。

何かをつかむようにしてなくなっている人も多くいた。山の上までレンガ色、未だに覚えている。音を立てながら長崎市が燃えていて「ああ長崎が泣いている」と思った。その炎の光、色、音は今でも記憶に残っている。

郊外の古賀村に向かって歩いていて道中の泥水も飲んで、腐ったご飯も食べた。今でもその日の朝にならないと体調がわからなくて一日中寝込む日も少なくない。

感想

私はこのビデオを見て、一番印象に残ったのは「道中の泥水も飲みましたね。腐った食べ物も食べましたよ」という言葉です。しかし私が驚いたのは、この言葉の内容ではありません。もちろん泥水を飲んでいたり、腐った食べ物を食べていたことどちらも驚きましたが、私がビデオを見て一番驚いたのは美枝子さんがこの話をしたときの声色、表情です。美枝子さんはこのことを当たり前のことだったというような表情で話していたのです。

本当にそう思っていたのか私にはわかりませんが、この原爆が落ちたことによって、そのようなことが多く起こっていたことを経験した方の口から聞くことによって戦争の残酷さがより伝わってきました。今でも覚えているほどの衝撃、多くの声、音、経験した方から聞くと今までよりも鮮明に想像することができました。

豊沢 咲奈 団員

証言者 深堀 譲治 さん(被爆時14歳)

証言内容

6日の広島原爆の影響で規制されていた空襲警報中での労働が9日の朝許可された。深堀さんは、工場がある長崎市長崎中学校校舎内で被爆。

爆心地に近い自宅には、母と弟2人、妹を残していた。家があったであろうまっさらな土地には全身火傷で天を掴むような格好で亡くなる母の遺体があった。弟と妹はおつかい中に被爆。上の弟以外はその晩に亡くなり、上の弟は終戦を迎えてから息をひきとった。

感想

長い年月が経っても、当時の様子を細かく鮮明に覚えている様子を見て、より原爆の残酷さを感じました。深堀さんは工場へ出かけていたことで助かったけれど、もし自宅にいたら、もし空襲警報中は工場に行かなくてよいという指示が続いていたらと考えると多くの奇跡があったのだと思います。

当時の深堀さんは私と同じ中学3年生でした。一瞬にして家族も居場所も失った人々の気持ちは、私は実際に知ることができません。ですが、被爆者の方々の話を伝承し、核廃絶を訴え続けることは原爆によって深く傷を負った人への供養になると思います。そのために、今ある平和な日常への感謝を忘れず、戦争の悲惨さ、恐ろしさを理解していきたいです。

古屋 陽輝 団員

証言者 小林 幸子 さん (被爆時7歳)

証言内容

原爆落下時は、近所の友達の家で遊んでいたが、大きな音と衝撃波が家を襲い、屋根が落ち、幸子さんは畳の下敷になっていた。

幸子さんのお母さんは、近所のお子さんの面倒を見ていたため、幸子さんの弟が背中に大火傷していることに気づかず、原爆が投下された日の夜中に幸子さんの弟は亡くなられた。

感想

私は、この被爆証言ビデオを観て、原爆はとても恐ろしいものだと思えました。幸子さんの友達の家は一瞬にしてくずれ落ち、幸子さんの家も大きく傾き、飼育していた馬は丸焦げになって死んでいたそうです。また、幸子さんの弟は大火傷をしているにも関わらず、人手が足りず、治療が行えませんでした。

このことから、私は原爆という未知の物質が投下されたことによって出た被害は、私達が想像のできないものなのだと感じました。そして、私達は二度とこの世で同じようなことが起こらないよう、後世に原爆の恐ろしさを伝えていかなければならないと強く感じました。

恩田 智己 団員

証言者 谷口 稜嘩 さん (被爆時16歳)

証言内容

飛行機の音が聞こえて、振り向こうとしたときに原子爆弾が投下されたそうです。あっという間に自転車もろともとばされ、地面は地震のように揺れたそうです。その時谷口さんは「自分はそのまま死んでしまうのではないかと死の恐怖に襲われたそうです。その時にできたやけどは普通とは違い骨までくさってしまったそうです。

谷口さんは「世界の人々と手を取り合い、平和で豊かな生活ができる世の中にする。核と人類は共存できない」と証言しています。

感想

僕は今まで、戦争と今ではその時の生活の仕方や、人の思いは全く違うものだと思っていました。しかし、谷口さんのお話を聞き、死の恐怖や生きたいと思う気持ちは今と変わらずにあるのだと知りました。

また、原子爆弾が投下される前まで普通に生活をしていて、その日常を一瞬で消してしまった恐ろしいものなのだと改めて知ることができました。生きることができたのだとしても、やけどなどの後遺症によって今までと同じ生活を送ることができない状態になってしまうのだと知り、核兵器は絶対に許してはいけないものだと思えました。

谷口さんは「世界の人々と手を取り合い、平和で豊かな生活ができる世の中にする。核と人類は共存できない」とおっしゃっていたように、世界が戦いあうのではなく、ともに助け合い、平和で豊かな生活ができるように、自分にできることを少しでもしていきたいです。そして、もう核兵器が使われない世の中になってほしいです。

細山 雅喜 団員

証言者 森田 博満 さん(被爆時10歳)

証言内容

午前10時に国民学校でウサギの世話をし、その後、家に向かう道中で西の空から何かが落ちてくるのが見えた。やっと玄関に着いたと同時に爆風で家の中へ吹き飛ばされた。

その後、家族で高台に避難し、そこから見えた景色は長崎の地が燃え、まさに地獄だった。

感想

僕は、このビデオを視聴し、原爆の惨さと恐ろしさを改めて認識しました。

森田さんは、原爆が投下された後の街の様子を語られていましたが、それは、想像を絶するものでした。「焼けただれた人間の皮膚が風でもってビラビラ靡くんです」と、これを聞いたとき、僕はとても信じられないと思うと同時に、森田さんは10歳にしてこんな経験をしたんだと思うと、戦争は物理的な被災以上に、人々の心を苦しめる精神的な苦痛を与える、そんなことはあってはならないと強く思いました。

ありがたいことに、僕は身をもって戦争を経験したことはありません。それは、当たり前な事ではないと気付かせてくれる動画でした。

松尾 悠大 団員

証言者 奥村 アヤ子 さん(被爆時8歳)

証言内容

アヤ子さんが小学三年生の時に、原爆を落とされてしまいました。アヤ子さんは家族がたくさんいたそうです。ですがその日家族八人は消えてしまったと言っていました。

爆心地から八百メートル離れているところだったため助かったそうです。姉妹と会えても話しをして名前を聞くまで、自分の家族だということもわからなく、目がとれてしまい顔が半分こげてしまっていたそうです。その後、姉も亡くなってしまったと話してくれました。

感想

私は奥村アヤ子さんの話を聞き、とても衝撃を受けました。原爆のことは、少ししか知らなかったけど、話を聞き、調べるとこんなにひどいことだったのかと思いました。

アヤ子さんは八百メートル離れていたから、助かることができたが、もう少し爆心地に近い人は、死んでしまいました。広島にも原爆が落とされましたが長崎の方が威力の大きい爆弾が落とされたそうです。ですが被害は、広島の方が大きかったそうです。その理由としては地形が関係しているそうです。広島は市街地に落とされてしまったが、長崎は、市街地から少しはずれたところに落とされてしまったらしいです。元々原爆の落とすところは北九州、広島、新潟、京都の4つ選択肢があったそうです。ですがその日は北九州では雲が厚く、下をみることができずに落とすことができなかつたため、長崎に落とされたそうです。そんな気まぐれで人がたくさん死んでしまい、死なずに生きのびることができても後遺症などでつらい思いをしてしまう人がでてしまうなんてひどいと思いました。この話を聞き、私は今の生活がどれほど幸せなのかを思い知ることができました。これからも、この生活のありがたみを知り、私の命を大切にしようと思いました。

『学習レポート』

中学生、高校生の団員は各自でテーマを選択し、レポートの作成・発表を行いました。

習志野市立第一中学校 3年 土岐 光喜

長崎市平和公園

長崎市平和公園は、爆心地を中心につくられた、平和を願い、実践していく交流公園。
以下の5つのゾーンに分かれているが、平和事業に関連するものは、
祈りのゾーン、学びのゾーン、願いのゾーンの3つで、平和の尊さを発信している。

祈りのゾーン

原爆の爆心地で公園の中心。
被爆の史実を伝え、被爆で亡くなった
方のご冥福を祈る空間

- ・原子爆弾落下中心碑
- ・被爆当時の地層 など

学びのゾーン

原爆の惨状をつたえる資料の展示、被爆し
た方の講話などが行われている。

- ・長崎原爆資料館
- ・国立長崎県原爆死没者追悼平和祈念館
など

願いのゾーン

毎年、8月9日に式典広場で平和祈念式典が催さ
れる。世界各国から贈られたモニュメントを配置

- ・平和祈念像（右図）……北村西望の力作
- ・平和の泉……水を求めて亡くなった方々を慰霊
- ・長崎の鐘……工場で働いていた犠牲者を慰霊
など



- ・スポーツのゾーン……サッカー場、野球場など
- ・広場のゾーン……陸上競技場、弓道場など

スポーツを通して、
平和への願いを育む場

沿革

- ・1946年（昭和21年） 長崎市、戦災復興土地区画整理区域を決定。
- ・1949年（昭和24年） 爆心地公園に原爆資料館を開設
- ・1994～97年（平成6～9年） 大規模な再整備工事
- ・2008年（平成20年） 国の登録記念物に登録される。

ここを訪れた著名人

- ・1981年（昭和56年） ヨハネ・パウロ2世（ローマ教皇）
- ・1982年（昭和57年） マザーテレサ（カトリック修道女）
- ・1991年（平成3年） ミハイル・ゴルバチョフ（旧ソ連大統領）
- ・2001年（平成13年） ハラルド5世（ノルウェー国王）
- ・2016年（平成28年） ヨアヒム・ガウク（ドイツ大統領）
- ・2019年（令和元年） フランシスコ（ローマ教皇）

このほかにも、
天皇皇后両陛下や
各国首脳がここを
訪れている

長崎に落とされた原子爆弾と経緯

・広島市・長崎市に落とされた原子爆弾

	広島型 (リトルボーイ)	長崎型 (ファットマン)
投下日	1945年 8月 6日	1945年 8月 9日
種類	ウラン235	プルトニウム239
1945年12月末 までの死者数	約 12万人	約 7万人
3~5年後 までの死者数	約 20万人	約 10万人
直径	約 0.7m	約 1.5m
長さ	約 3m	約 3.25m
重さ	約 4.0t	約 4.5t
火薬を使った爆弾にして	約 1万5千t	約 2万2千t
メリット	構造が単純で実現しやすい。 濃縮困難なウラン235を使用	不純物の多い、 プルトニウムは問題ない
デメリット	濃縮困難なウラン235を使用 する必要があり、量産が困難	構造が複雑で、 実現できるかわからない

・長崎に原子爆弾が落とされた経緯

原爆を投下したときに、破壊の効果が大きく、また空襲を受けていない場所を探しました。最初に第一候補に上がったのは京都でしたが、主な軍事施設もなく一般市民の多く暮らす京都に原爆を投下すれば、国際社会からの非難を浴び、利益に反すると考えました。

最終的に、原爆を投下するのは、広島市、小倉市(福岡)、長崎市に決まりました。特に広島は、広い平野なために、大きな効果を上げ、威力の測り定にも適していたため、最初の投下地となりました。(8月6日)

8月9日原爆を積んだ飛行機は、小倉へ向かっていたが、隣の市が前日に空襲を受け、大火災の煙が小倉をおおい、投下目標の確認がびきなかったため、小倉への投下を諦め長崎へ向かいました。長崎上空も厚い雲におおわれていたが、雲の切れ目から投下予定地点の、北寄りの地点が見え、市中心部から3km北の地点へ投下されました。(ドイツ、イタリアがすでに降伏していたため日本に原爆が投下された。)

長崎原爆資料館について

<どのような建物なのか>

長崎原爆資料館は、原子爆弾による被害の状況や長崎の復興の様子、核兵器のない恒久平和を世界中の人々に伝えるために設立されました。館内の展示に「1945年8月9日」「原爆による被害」「核兵器のない世界」というテーマごとのストーリーを持たせ、分かりやすく当時の様子を伝えるとともに平和への願いを発信します。

<何が展示されているのか>

館内には、原爆投下で時が止まったままの「11:02の時計」や、折れ曲がった工場の鉄骨、爆心地側の部分が熱線により焼けた橋げたなど、原子爆弾によって破壊された建物の一部が移設されています。熱線で溶解した遺物などの被爆資料を展示し、一部の資料には手で触ることができるようにしてあり、原子爆弾の悲惨さ、凄惨さが伝わってきます。なかでも、「被爆した長崎の街」のコーナーでは、長崎市内外の地形模型を使い、原爆被害の面的な広がりを見ることができ、視覚的に理解することができます。また原爆記録映像や被爆者の証言ビデオなどの上映もあり長崎原爆の全体像を学ぶことができます。

平和祈念式典及び平和祈念像について

【平和祈念式典について】

○正式名称 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

○挙行日 毎年8月9日

○行われる場所 松山町平和公園 平和祈念像前

平和祈念式典は、犠牲者の親族の方や、地域の方々国連加盟国の首相などが参加をして挙行されます。

平和祈念式典は全国の地方公共団体などへ送るとともに、インターネットで毎年配信されており、

この配信を通して核兵器廃絶と世界恒久平和の確立を訴え続けています。

【平和祈念像について】

○1955年 被爆10周年に向けた記念行事の一環として長崎市が設計を計画された

○像の高さ 約9.7m

○像の重さ 約30トン

この像は青銅で作られています。右手は原爆を示し、左手は平和を、右足は横にしていることで静寂、

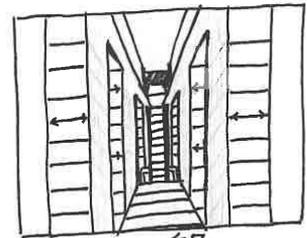
対象に立ててある左足は立ち上がろうとする力や救った命を、目は薄く閉じていて戦争犠牲者の冥

福を祈っています。

国立長崎原爆死没者 追悼平和祈念館について

⑥国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館とは

- ① 原子爆弾による死没者へ追悼の意を表し、永遠の平和を祈念すること
 - ② 被爆体験を継承するための情報を収集し、提供すること
 - ③ 被爆医療や平和を中心とした国際協力をすること
- これら3つの目的を持った施設。



⑦祈念館内の施設 (抜粋)

- 水盤 ... 7万個の光を放つ直径29mの水盤。
7万の光は原爆死没者の命の灯火を、水は被爆時の喉の渇きを癒やすものとして表現されている。
- 追悼空間 ... 原爆死没者の氏名を記載した名簿が納められている。名簿棚の方角には、原爆中心地がある。

山王神社について

「山王神社とは」

山王神社は寛永15年(1638)松平伊豆守信綱が建てたもので、村社であった日吉神社と県社の皇大神宮とが合併して創りされた神社で、浦上皇大神宮とも称されている。

「原爆について」

昭和20年8月9日午前11時02分、長崎市への原子爆弾投下によって鎮座地が爆心地から約800メートルの地点に位置していたために被爆し、原爆の熱線と爆風により、死に絶える

寸前となりながら豊かな糸繰を取り戻した榎樹令500～600年の大クス(被爆クスノキ)がある。現在では山王神社のシンボルとなっており多くの人に愛されている。

山里小学校について

～学校の歴史～

山里小学校の前身は明治7年に開校しました。

その後、明治15年に中野郷の中野小学校と合併して、山里小学校と称することとなりました。中馬込学校・山王小学校と合わせて、令和4年度で148年目となる歴史と伝統ある小学校です。

～原子爆弾による被害～

原爆地とは北へ約700mの場所にあり、当時の校舎は現在の運動場の場所に建っていました。原子爆弾の影響により、北側の1・2階を残すのみで全焼。児童の犠牲者は約1,300人にも上りました。

～敷地内～

現在、学校の敷地内には「原爆資料室」「あの子らの丘」「防空壕」などの平和学習関連施設があります。特に「防空壕」は、戦時中グラウンドの東側と北側の崖に空襲から命を守るため、全部で20か所余りの防空壕が彫られ避難場所になっていました。

原爆投下当日、新しく防空壕を掘る作業をしていた先生方や近所の人たちがこの崖にたたきつけられ壕の中と外で亡くなりました。熱線や放射線、爆風を受け負傷した人々がこの防空壕に避難しましたが、多くの方がこの中で亡くなっています。現在では三つの防空壕が、裏門石柱とともに残されています。二度とこのようなことがないように、戦争や核兵器の廃絶を願い、平和を尊ぶ気持ちを大切にする場所として、この防空壕が今でも残されています。また、永井隆博士作詞の「あの子」の歌は、第二校歌といわれるほどに愛好されており、山里地区の人々と共に平和希求の思いを受け継いでいます。

～現在の学校～

令和3年度に、学校教育目標として「やさしさと思いやりで、笑顔がいっぱい～本物の笑顔あふれる山里小～」を掲げ、627人の児童の健やかな成長を願い、全教職員で力を合わせ、質の高い充実した教育活動を推進しています。

浦上天主堂について

・浦上天主堂とは

1925年(キリシタン禁教令が解かれた後)長崎県長崎市本尾町に、フレノ神父と信徒たちによって「祈りの城」としてレンガで造られたキリスト教(カトリック)の教会、聖堂です。

そして今はカトリック浦上教会の名称で長崎市の観光名所になっています。

・原子爆弾による被害

被爆地から約500m程離れた所に位置しており、建設に約30年もかかったものの原爆により一瞬のうちにして殆ど壊されてしまいました。そして浦上天主堂の象徴でもある「アンゼラスの鐘」が重さ約50tにもかかわらず、原爆による爆風で35mも吹き飛ばされました。

また信徒は約12,000人のうちの60%ほどに当たる約8,500人が犠牲になったといわれています。

被爆後も、広島原爆ドーム同様、保存が検討されましたが破壊が激しく断念、その後再建されて現在に至っています。



爆風により飛ばされた鐘

【出典】

“ながさきの平和”<https://nagasakipeace.jp/>

“ながさき旅ネット”<https://www.nagasaki-tabinet.com/>

“写真で見る日本の歴史”<http://www.pict-history.com/theme/t03.html>

閲覧2023.07.09

永井隆について

◇どんな人なのか？

1908年2月3日生まれで小学校、中学校ともに運動はできないが優等生であり、頭がよかった。その後大学も優等生で卒業し医者となろうとする。その後満州事変や日中戦争に参加し、帰国後放射線について多くのことを調べていた。1945年8月9日午前11時2分に長崎に原爆が落とされた。この原爆投下で最愛の妻を亡くしてしまった。その後白血病にかかり1951年43歳で亡くなってしまった。



◇何をした人なのか？



元々放射線について詳しく研究している人であり、被曝の2ヶ月前に白血病で余命3年を医者に言われた。2ヶ月後原爆が長崎に落とされ、最愛の妻を失う。原爆投下によって隆自身も重傷を負っているが、周りの人の救護・救助にあたり支援の人が不足しているなか多くの人の命を救った。その後も放射線について研究し、白血病で亡くなってしまった。だが余命3年と宣言されてから6年もの間研究に励んだ。隆の息子が隆氏が亡くなったあと研究の成果を1949年に『長崎の鐘』発表した。紙不足の当時では異例のベストセラーとなった。長崎の鐘は歌にもなりNHK紅白歌合戦でも歌われたことがある。

<https://www.youtube.com/watch?v=VPrKdVswN8s> ←長崎の鐘の歌

参考文献・wikipedia・Nippon.com・和楽wed

◎第3回事前学習会

第2回事前学習会にて、団長の齋藤路子さんによる被爆体験講話を聴き、第3回事前学習会の際に、団員がそれぞれ感想を提出しました。



Profile さいとう みちこ 齋藤 路子さん

- ★被爆者2世で、二人の子の母親です。
- ★原爆が投下された当時母は、長崎の三菱造船所に勤務しており長崎高商に疎開中、被爆しました。
- ★平成30年度に市が実施した被爆体験講話朗読者養成講座を受講し、現在は市内の小・中学校で被爆体験講話をおこなっています。

青木茂さんについて

- ★ 大正14年1月7日に、佐賀県杵島郡大町町という炭鉱のある町で生まれ、昭和15年1月に長崎三菱兵器製作所という工場に就職しました。
- ★ 戦争が始まると人手が足りず、朝の7時から夜の7時までが作業時間になったうえ、毎日2時間から4時間の残業があり、日曜日も休みはありませんでした。
- ★ 戦争中は水と空気しかなく、食べるものも着るものもありませんでした。
- ★ 20歳のとき、爆心地から約2.2キロにあったトンネル工場勤務中に被爆しました。
- ★ 被爆による後障害に長く苦しみ、満足に働けない状態が続きました。また、白血球が少なくなり、息子や孫にもその影響がでました。
- ★ 千葉県原爆被爆者友愛会の会長として永く尽力され、習志野だけでなく、千葉県全体の被爆者のために奔走されました。

団員の感想

秋本団員

青木茂さんの話を聞いて、印象に残ったのは、子どもや孫の代にも影響があったことです。青木さん自身、まつげが抜けたり、歯茎から出血したりと体調的な苦しみや職場長夫婦を一日かけて一人で火葬するような精神的な苦しみを味わっていました。それだけでも十分に辛いことであるのに、子どもや孫が白血球の不足により、ケガが治り難かったり、就職の場面で差別されしまうことは悲しいことだと思いました。

青木さんにとっては、何の罪もない子ども、孫に辛い思いをさせてしまっているという罪悪感が戦争が終わった後の何十年も掛ければいけず、一方、子どもたちも生まれ持った体調で苦しみを味わうが、決して親を責められるものでもないため、逃げ場を失った憤りとともに人生を歩んでいかなければならないことが本当に辛いなと思いました。「戦争はまだ終わっていない」という言葉をよく耳にしますが、そのことを実感した講話でした。

土岐団員

私が印象に残ったのは2つある。1つ目は、原爆投下後、すぐに「工場」のために人々が動いたということだ。自分が負傷しており、家族の安否もわからない状況で、「お国」を優先しなければならない、またそれが当時の当たり前の価値観であったことがとても辛い。2つ目は、原爆の後遺症についてだ。被爆から数年経っても治らず、周囲の人たちに理解してもらえなかったり、自分の子どもも発症してしまったり……。悔しいような、もどかしいような、やりきれないような気持ちになる。何万何千人という数字の1人ひとりがこのような体験をしたと思うと、本当に心が痛む。

佐々木団員

僕は今回の講話で、こんな被害が出た、こんなことにあったといった様々なお話を聴いて、核兵器の恐ろしさと平和の大切さについて、自分では、わかったつもりになっていますが、実際に何か被害を受けた物を見たことはなく、僕の「わかった」は、言葉だけなのではないかと思いました。長崎へ行き、実際の物を見て、核兵器の恐ろしさ、平和の大切さについて自信を持って「わかった」と言えるようにしていきたいです。

木村団員

今回の齋藤路子さんによる青木茂さんの被爆体験の講話を聴いて、実際の現場の状況などが、頭に浮かんでくる、そんな感じがしたのが、率直な感想です。今の時代、現場目線で、原爆の被害を語る方が少なくなっているのが現状という中で、貴重なお話を聴けたことは、とても勉強になりました。

講話の中で思ったことは、青木さんの経験が具体的に表現されているところです。自分が経験した辛いこと、悲しいこと、普通の人だったら嫌で逃げ出したくなってしまふ、そんな立場なのに、この思いを後世に伝えるという思いで、話されているのは、とてもすごいことだなと感じました。

また、この講話の中で、「核と人類は共存できない」という言葉があって、核によって、苦しみ、住めなくなってしまうという自分自身の思いも伝えられていました。今後再び、原子爆弾がこの世の中に落ちないように、このような講話を日本中だけでなく、世界中にも広めていきたいと思いました。

川向団員

今回の講話を聞いて、核兵器は落ちて直接人の命を奪うことしかないと思っていたけど、被爆後、外傷がなく助かった人達や直接原爆を見てもない人達でも身体の内側を破壊されていて、戦争が終わった後でも、苦しみは終わらず、日々被爆したことによる後遺症に今でも悩まされているということを知りました。戦争は当時の人々の幸せを奪っていくだけではなく、その後の人達の日々の自由まで奪っていたことを知り、戦争が終わって戦いが終わっても、すべてが元通りにならないことを改めてよく知ることができました。

豊沢団員

齋藤さんから青木茂さんの被爆体験講話を聞いて私は衝撃を受けました。空襲警報が当たり前のように鳴る日々や、その中でも工場で強制的に働かされている子どもたちを想像すると、とても恐ろしく信じがたいです。また、原爆の影響で子孫にまで白血球の減少、貧血などの症状が続き、差別もあったことが印象に残っています。このことを知って、少し他の人と違うだけで人からの攻撃を受けるのは今も昔も変わらないなと思いました。多くの人に深い傷を残した戦争を二度と起こさないため、長崎派遣という貴重な機会を無駄にしないようにしたいです。そして、青木さんのように経験したことを力に変えて誰かの心を動かすような活動をしていきたいです。

古屋団員

今私は今回の講話をきいて、改めて核兵器は恐ろしいものであり、二度と使われることがないように、後世へ伝えていくことが重要だと思いました。広島や長崎に投下された原子爆弾は一瞬にして、たくさんの人の命をうばい、今まで罪のない人達がくらしてきた、ふるさとも灰となりました。自分自身も、核兵器の恐ろしさを後世に伝えていく義務があるのだと強く、実感しました。

恩田団員

私は今まで戦争について8月6日に広島に、8月9日に長崎に原爆が落とされたなど、第三者の意見しか聞いたことがなく、恐ろしいとは思いつながらもどこか違った国の話のように感じていました。しかし今回第三者の意見とは違った視点で話を聞くことができ、その時もっていた感情や状況を鮮明に話していて、背景や風景がどうだったのか想像がしやすかったです。また、後遺症の影響が理解されてきていますがそれでもまだ知らない症状があったりしてもっと知っていくべきだと思いました。

今回このお話を聞かせていただき、今まで想像していた状況とは何もかもが違い、自分が想像していたよりも恐ろしかったことに驚きましたが、実際の場合はもっと恐ろしいのだと思うので、訓練などをしっかり行う事が大切なのだと改めて思いました。

細山団員

僕は講話を聴くまで被爆に対する考えがとても甘かったと思いました。被爆して辛い思いをするのは、その本人だけだと勝手に思い込んでいましたが、青木さんのように白血球の数が少なくなり、自分の子や孫にまでその影響が出て、その度に辛い思いをされることを知るととても胸が苦しくなりました。

また、そんな人がこの世にこれ以上増えないためにも平和を創っていく必要があります、そのためには人と人が互いに尊重しあい常に公平でなければならないと思います。そして何よりも戦争や核兵器(歴史)から学んだ事を忘れずに活かしていくことが一番重要だと思います。

松尾団員

女性が走ったときに髪が後ろになびくのではなく、上や横に逆立ってしまうということを朗読で言っていました。それを聞いて、私は想像ができませんでした。髪が放射線によって脱毛してしまうケースなら聞いたことがありましたが、髪が逆立ってしまうことは初めて聞きました。

原爆の放射線によって後遺症が残ってしまい、その後遺症が職業選択に影響してしまったり、息子や孫にも影響がでてしまうということは、とてもおどろきました。今回の講話を聞いてより一層核戦争への恐怖心が高まりました。

◎平和祈念原爆展および

『ヒロシマ』・『ナガサキ』を繰り返さないための被爆体験の語りとビデオ上映

8月8日から10日にかけて予定していた長崎市への派遣を台風の影響により日程を変更したことから、急きょ、8月10日に千葉県庁で開催された千葉県原爆被爆者友愛会主催の「平和祈念原爆展および『ヒロシマ』・『ナガサキ』を繰り返さないための被爆体験の語りとビデオ上映」に行ってきました。

○ビデオ上映

多目的ホールで原爆に関する映画「父と暮らせば」を鑑賞しました。

○「原爆と人間」パネル展

特別展示として、広島市立基町高等学校の生徒が描いた原爆の絵が展示されていました。



○被爆体験の語り「1歳で被爆 叔父夫婦の下で成長」

長崎で1歳のときに被爆した荒木忠直さんの体験をお聞きしました。忠直さんの姉の話や他の被爆者の方の話などを基に、一発の原爆で日常生活が破壊された当時の惨状を語っていただきました。話を聞いた後、派遣生や来場者からの質問にもお答えいただきました。

荒木忠直さんについて



- 祖父母、父母、7歳上の姉、5歳上の姉、忠直さんの7人家族。
- 長崎に原爆が投下された当時、爆心地から約1.4km離れた自宅で被爆。1歳2か月であった。家の布団で寝ていたところにタンスが倒れてきたが、運よく押しつぶされず生き残ることができた。
- 家族全員助かったが、終戦から2年経った頃、父が2か月の入院を経て放射線の影響による胃がんにより40歳で9月に死亡。その2か月後に母が34歳で衰弱死。さらにその3か月後に祖母も59歳で死亡し、半年の間に家族3人が亡くなった。
- 祖父一人では子ども3人を育てることはできず、3歳の忠直さんと5歳上の姉は東京の叔父夫婦に引き取られて育った。



写真で綴る長崎訪問



8月9日の長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が台風の影響により、関係者のみの参列となったことから日にちを変更し8月24日・25日の二日間で長崎市へ赴き学んできました。

8月24日(木)

6:10 京成津田沼駅を出発

10:50 長崎空港に到着



12:30 三菱兵器製作所住吉トンネル跡を見学



14:10 平和公園内にて千羽鶴の献納



14:30

市内フィールドワーク（平和案内人によるガイド）

ボランティアガイドの船井サナミさんによる説明を受けながら、長崎市内を見学しました。

【見学コース】

原爆落下中心地 → 被爆当時の地層 → 浦上天主堂遺壁
→ 浦上天主堂 → 如己堂・永井隆記念館 → 山里小学校
→ 山里小学校内防空壕 → 平和祈念像 → 長崎の鐘
→ 平和の泉 → 市内防空壕

● 【原爆落下中心地】



◎原爆落下中心地

当初は昭和20年に爆心を決定した調査団によって煙突の破片に「爆心centre」と書いた標識が建てられました。その後何度か標識の建替えや修理が行われたのち、昭和43年に現在の碑の姿になりました。

付近では被爆当時の地層や浦上天主堂の遺壁を見ることができます。

● 【被爆当時の地層】



◎被爆当時の地層

原爆落下中心地にあたるこの地層には、家の瓦や溶けた食器などが埋没しており、被爆当時、原爆が落ちるときまで生活が営まれていたことがわかります。

● 【浦上天主堂遺壁】



● 【浦上天主堂】



◎浦上天主堂

30年の歳月をかけて建てられた聖堂が、原爆により全壊。当時、長崎には約12,000人のカトリック信徒がおり、そのうち約8,500人が爆死したと言われています。戦後、コンクリートで再建され、昭和55年に外壁を煉瓦タイルで改装、昔の面影がよみがえりました。

● 【如己堂・永井隆記念館】



◎如己堂（永井隆記念館）

長崎医大教授でカトリック教徒であり、長崎市名誉市民第一号である永井博士の晩年の住居。博士は爆心地から約700mの長崎医大付属病院で被爆し、重症を負いながらも被爆者の救護活動に奔走しました。戦後、博士は以前から患っていた白血病の進行により寝たきりとなり、2人の子どもと共に畳2畳のこの如己堂で暮らしました。



● 【山里小学校】



◎山里小学校

鉄筋コンクリート3階建ての校舎が原爆で崩壊。除草作業や防空壕を掘っていた32人の職員の内、生存者は4名だけでした。生徒は学校に居ませんでしたが、推定で約1,300人が死亡したとされています。学校敷地内で当時の写真や、再現模型、爆弾の熱で溶けたガラスなどの展示をしています。

● 【平和公園祈念像地区（平和祈念像・長崎の鐘・平和の泉）】



◎平和公園（祈念像地区）

平和公園の「願いのゾーン」として位置づけられる祈念像地区は、平和祈念像を中心に平和の泉や世界各地から寄贈されたモニュメントなどの平和のシンボルがあります。8月9日に行われる平和祈念式典は、平和祈念像前で挙行されています。

20:00

宿舎に到着

8:00 宿舎発

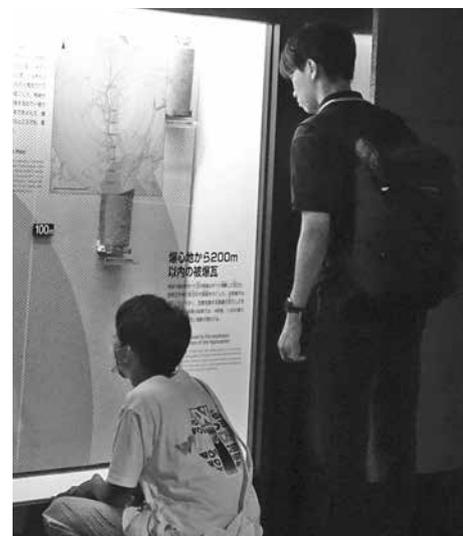
8:30 長崎原爆資料館 見学前半

◎原爆資料館

長崎市への原子爆弾投下に関する資料を取り扱った長崎市立の資料館です。「1945年8月9日」「原爆による被害」「核兵器のない世界」などのテーマに沿って、資料、写真、解説パネルなどが展示されています。



噴き上げる巨大なきのこ雲。
なにが起きたのか。
人びとはどうなってしまったのか。
雲の下の真実を、知ってください。
—— 忘れないでください。
—— 伝えてください。



9:25

長崎原爆資料館内にて池田道明さんによる被爆体験講話
(詳細は 38 ページから 41 ページまで)



10:50

長崎原爆資料館 見学後半



14:30

長崎空港 出発

18:01

京成津田沼駅 解散

被爆体験講話

2日目(8月25日)の資料館にて、実際に長崎で被爆された池田道明さんによる被爆体験講話を聴きました。池田さんの当時の体験談を掲載します。



Profile いけだ みちあき 池田 道明さん

国民学校1年生の時、長崎医科大学付属病院で被爆。火炎の中、金比羅山の高射砲陣地まで逃げ延びそこで一泊。翌日、下山し母と再会。その過程で見聞きした様々なことを語り継ぎ、悲劇を繰り返してはならないという思いと共に後世に伝え続けています。

8月9日午前

私と母親は2人だけで、浜口町に部屋を借りて住んでいました。私の母親は、当時は付き添い婦といって介護士のような仕事を大学病院でしていましたので私は母親と一緒に大学病院へ行っていました。

私の隣の病室に、シゲちゃんという同級生の男の子がおばあちゃんと一緒に大学病院で寝泊まりをしていました。

その日、屋上で2人のどちらが大きい爆弾の破片を見つけられるか勝負をしようと、二手に分かれて遊び始めました。しばらくすると、シゲちゃんが私の方へ「みっちゃーん」と言いながら駆けてきます。そして、「もう降りようかー」と言いました。私が「どうして?」と言うと、シゲちゃんは「便所に行きたくなった」と言いました。私は「シゲちゃんに負けているから、それより大きいのをみつける」と言いましたが、シゲちゃんが「これをあげるから、一緒に降りようや」と言いました。私はそれをもらって、エレベーターを呼びました。その時11時1分を過ぎていました。

閃光

エレベーターで1階まで行き、暗い廊下に2人がドンと飛び出したその瞬間です。右手の暗い廊下が突然ピカーッと光りました。太陽の光よりも明るい光です。その光を見た途端、私は気を失ってしまいました。ドカーンという、爆発の音も聞いていませんし、爆風でガラスが割れたり、物が飛んできたり、そういう音も、全然聞いていません。気絶して5分経ったのか、10分経ったのかわかりませんが、何かパチパチ燃える音がします。また、煙の臭いで、はっと気がつきました。あたりを見ると、真っ暗で目が見えません。私は目をやられたと思いました。シゲちゃんもいたことを思い出し、目が見えていないので方向もわかりませんが暗闇に向かって「シゲちゃん」と呼んでみました。返事がない。またしばらく経ってからもう一度「シゲちゃん」と呼びました。すると、暗い中から「みっちゃーん」という声がします。私が「どこにいるのー」と言うと、「ここよー」と返事をくれますが、姿が見えません。だんだんパチパチ燃える音が近づいてきます。煙もたくさんありました。

原爆投下後

ここにいたら危ない。どこかに逃げようと思いました。そうするうちにだんだん辺りが見えるようになりました。私は、エレベーターの前の廊下に立っていたはずなのに、その廊下の板が全部めくれて下の土の上に転がっていました。

その向こう側の壁にもたれて、看護婦さんがしゃがみ込んでいました。ガラスの破片で怪我をして、看護婦さんの白いユニホームが、頭から血をバケツで浴びたんじゃないかと思うぐらい真っ赤になっています。私が近づいていくと、その看護婦さんが私を睨みつけるようにして怒ったような声で「警防団を呼んできなさい」といいます。私は警防団がどこに行けばいるのかを知りません。でもいつまでもそこにいると、また叱られそうなので、ガラスが全部なくなった窓から中庭に飛び出しました。

大学病院の中庭の惨状

中庭は、憩いの場所でしたが、木は全部倒れて燃えています。お花畑は全部吹き飛んで何もありません。その火の海の中で、あちこちで10人ばかり人が死んでいます。この人たちは、爆弾が落ちる前から、中庭にいた人たちなのだと思います。死体を見ると、髪の毛がチリチリに燃えてしまっています。目玉が、ポーンと飛び出して、ほっぺたにぶら下がっています。上唇は上へ、下唇は下にめくれて、歯がむき出しになっています。全身真っ黒です。人間は焼けると、油が出ます。油に埃や煤がついて真っ黒です。足、腕、お腹は2倍ぐらいにパンパンに張っています。浴衣は吹き飛んでしまい、身につけてるものはパンツとシャツぐらいです。元の色がどんな色かどんな模様が入ってたか、全くわかりません。家族を連れてきても、判断できないぐらいに変わってしまっているのです。

当時は原子爆弾なんて言葉はありませんでしたから、大学病院に大きな爆弾がたくさん落ちたと思ったので、大学病院から逃げ出せば助かるなと思いました。

母親との再会

8月10日。避難していた山を下り、母親がいる大学病院へ向かっていると、どこからかシゲちゃんが私を見つけて、「みっちゃんどこ行ってたのー」と言って走ってきます。そして、「おばちゃんが心配してたよ、おばちゃんはけがして寝てるよ」と言いました。

病室へ駆け込むと、私の母親は、背中に100個ぐらいのガラスが突き刺さり、ベッドでうつ伏せになっていました。私は、安心したのか、母親の姿を見た途端、涙がポロポロポロポロ出て、止まりませんでした。

母親が、爆弾が落ちたときはどうしていたか、どうやって逃げたか、ごはんは食べたか、どこで寝たかをいろいろ質問してきました。それに答えて、私は疲れていたけれども横にシゲちゃんがいたため「シゲちゃんと遊ぶ」といって、2人で中庭に出ました。

まだ、煙が上がって燃えていました。

病室前にて

病棟の端には3名の方が生き残っていました。その人達が私とシゲちゃんを見て、病室に入ってきなさいと言いました。爆風で全部吹き寄せられて、山積みになったベッドに挟まれた死体が、病室の入口のところらぶら下がっています。この人は入院患者の友永さんという人でした。私が「友永さんが！」と言ったら、病室の中から「友永さんはもう死んでるから。何もしないから入ってきなさい」と言うので、私は友永さんの足(股)の下をくぐって

病室へ入りました。

そこには、一升瓶が転がっていました。私は「おじちゃん、お水を汲んでこようか」と言いました。「お願いします」と言われたので、私達はそのビンを持って、水を汲みに行きました。距離にして400メートルぐらいでしょうか。元守衛室の近くに3人の人が真っ黒になって倒れていました。死んではいません。その人たちのそばを通ると、ちょうど倒れている人と目が合いました。

私はその途端に、その人の口へ一升瓶の口を差し出していました。そうすると、水をこっこっこつと飲みました。ある程度飲んだら、は一と言って大きなため溜息をつきました。普通は、ありがとうとか、美味しかったとか、そういうことを言いますが、大きなため息だけです。隣の人も見ているから、隣の人にもあげて、そのまた隣の人にもあげて。ビンは空になりました。2回目の水を、また汲みに行きました。2回目の水を持って、スロープを上がっていきました。

大学病院の構内に入ったところにも、先ほどと同様に3人の人が真っ黒になって転がっていました。その人達にも水をあげました。また、ビンが空になったので、私達は3回目の水を汲みにいきました。そうすると、先ほど私が水を飲ませた人達はもう、息をしてなかったのです。

急いで病室にいるおじちゃんのところへいきました。「おじちゃん、僕がね、水を飲ませたらみんな死んでしまった」と言ったら、「・・・そうか」と言い、「でもね、みっちゃん。心配なくていい。その人たちはね、水を飲んでも、飲まなくてももう死ぬんだ。だからね、死の間際にみっちゃんからおいしい水をもらって飲んでね、安心して死んでいったんだ。だから威張っていいんだ」と褒められました。

それから

身寄りのないシゲちゃんは福岡県の久留米にある陸軍部隊の看護婦さんと一緒に久留米に行ってしまいました。それから私はシゲちゃんとは会っておりません。被爆者が書いた原爆詩という厚い本がありますが、それを読んでいたら、陸軍病院の看護婦さんの手記がありました。若い看護婦が長崎から5、6歳の男の子を連れて戻ってきた。そして看護婦寮と一緒に生活をしていた。看護婦さんのお姉さん夫婦に子供がなかったの、その子は、そこへもらわれていきましたという内容でした。私は「ああ、シゲちゃんはいいいところにもらわれたんだな」と思いました。

2008年に、朝日新聞、毎日新聞、西日本新聞、長崎新聞、この4紙に「シゲちゃんを探してます」という記事を載せました。シゲちゃんを知っていますという電話をいただいて、訪ねていきました。シゲちゃんは沖食堂の出前持ちをしてたそうです。足し算引き算ができないので、お客さんから苦情が来たり、ご主人に叱られたり、そういう場面を何度か見たという話でした。シゲちゃんは非常に明るくて、みんなから好かれる性格だったということでした。非常にハンサムで、明るくて、映画俳優みたいだったそうです。5年ぐらい前にシゲちゃんを見かけた際は車椅子に乗っていて、喉のところにガンコブができていて弱っており、その頃に亡くなったんだらうという話でした。

平和とは

戦争さえなければ、シゲちゃんの人生もまた違ったんだろうと思います。長崎に原爆が落とされて、78年になります。その間、一つの原爆も使われておりません。しかし、地球上は平和ですか？どこかでドンパチやっているんです。通常兵器ですが、ロケットも飛びます。いろんなところで、戦争をやっております。独立戦争もあります。種族の問題もあるでしょう。勝った国でも負けた国でも、被害があります。犠牲者が出ています。

平和とは、どんなことをいうのか。昔の哲学者は、戦争のない世が平和だといいます。今は、それでは駄目だと思うんです。「戦争が終わって、そして平和になる」という考えは、変じゃないかと思います。

昔の原爆は、4キロ四方を破壊するものでした。今の水爆は、この100倍もあります。戦争が終わったら、人間だけに限らず、生きとし生けるもの、生物、命あるものは全部破壊死滅してしまう。そんな後の平和なんて考えられないと思います。カントとかジャン＝ジャック・ルソーだとかそういう哲学者たちも議論をしました。やっぱり戦争がなくなった後に、平和が来るのだというような、そういう時代は終わりなのだと議論しています。

今の戦争は昔の戦争とは違うのだということです。始まったら終わりなのだとということです。平和は、そんな安いものじゃないということです。私は今、このように話ができます。あと10年しゃべれるかという、私、今現在84歳ですから10年という、94歳ですよ。果たして生きてるかどうか。生きていてもこうやって皆さんにお話ができるかどうか。これもわかりません。10年後、20年後は、皆さんが日本を背負っています。日本と言わずに世界を地球を背負っていきます。

皆さんには、この地球を守っていただきたいという願いで、本日の講話を終わらせていただきます。

長崎派遣を終えて



「皆さんが地球を守っていただきたい」

習志野市原爆被爆者の会 齋藤路子

令和5年度の「習志野市平和市民代表団派遣」は、台風接近の影響により長崎市「被爆 78 周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が、60 年に一度という主催者（長崎市）のみの縮小開催となり、急きょ振替で 8 月 24 日・25 日に行かせていただきました。

11 名の団員は、例年とは違う体験ができると、8 月 24 日早朝 6 時 10 分発の京成津田沼発のバスに乗り込み長崎に向かいました。

長崎に着き最初に訪れたのは、三菱兵器住吉トンネル工場跡です。長崎は、真珠湾攻撃に使われた魚雷を製造した三菱重工業兵器製作所に代表されるように、軍事工業の都市でした。ここでは女子挺身隊員や動員学徒、約千八百人が昼夜交替で魚雷部品の製造に当たっていたそうです。



午後は、船井サナミさんの案内で 78 年前の幾多の被爆建造物を巡り、原爆当時の痕跡や被爆の惨状に心が痛みました。

今まで、記録や映像で原爆や核の怖さにばかり気を取られていましたが、長崎で被爆し多くの信者が被害にあった浦上天主堂は、30 年もの時を重ね建立された隠れキリシタンの聖地でした。信者のより所であり、人々の日常があった。被爆後もそれは変わりなく続き現在に至っています。



25 日は、原爆資料館での見学、講話でした。資料館には、遺構のレプリカ他、原爆当時の残酷な品々が多く展示されています。それらを見て中高生達が、どこまで受け止められるか、直視できるか不安もありましたが、彼らは非常に熱心に陳列されている原子爆弾の高熱で変形した品々を真剣な態度で観察していました。そして、被爆の実相を知り平和の大切さを誰よりも深く学んだ事と思います。

また、原爆被爆者である池田道明さんの講話から「親友シゲちゃんも戦争がなければ違う人生があったのではないか？」今も世界では戦争がある。「皆さんが地球を守っていただきたい」との言葉は、被爆者として心の底からの声だと思いました。

最後に、団員のウクライナ戦争についての質問に対して「僕は、現地に戦闘機や、戦争機材を送ることは反対です。」とハッキリと答えられました。私も同意見ですが、世の中は違う方向に動いているように思います。核の脅威も確実にあります。

今回、改めて原爆被爆の悲惨さと核兵器の恐ろしさを目の当たりにしました。参加した団員 9 名が、帰宅後は一人でも多くの人達に平和学習で学んだこと、そして池田道明さんの「皆さんが地球を守っていただきたい」という願いを広めていっていただきたいと思います。

許しの連鎖

習志野市立第一中学校 教諭 秋本大樹

今回の派遣で感じたことは、長崎と広島の違いです。13年前の広島派遣の記憶と比べてみると、長崎の原爆の情報は「より生々しい」というのが第一印象でした。広島は物語やメッセージ性が強かった印象(13年前の記憶なのでズレがあるかもしれませんが)でしたが長崎では原爆資料館に展示してある写真や映像、展示品の数々、被爆者の活躍や思いが来訪者にストレートに伝わるようにありました。

また、地形の違いという視点でも2つの地域の差を感じました。長崎は、起伏の激しい地形で、大通りから1つ小道に入ると急な上り坂となる場所が多いです。現地のピースガイドの説明の中で、「この防空壕は投下場所を向いていたから…」というような、投下地点との位置関係や向きのお話が出ていました。このような視点においても、三角州に広がる平らな地形の広島とは異なる一面でした。

長崎と広島の共通点もありました。それは、原爆はまだ終わっていないということです。今回お世話になったピースガイドの船井さんは、長崎出身でも被爆者でもありませんでした。ピースガイドを始めたきっかけは、ある日、いつものように長崎市内を走るバスに乗っていたら、後ろに座っていた女性2人が、当たり前のように原爆が落とされた日のことを話していることに衝撃を受けたからだったそうです。78年前のたった1日がそれほど強烈な記憶で、被爆者の方の脳裏に焼き付いていることがわかりました。被爆体験講話をして下さった池田道明さんが小学1年生の頃の記憶をはっきりと語ることができるのも同じ理由だと思いました。長崎でも、広島でも被爆者の方は口をそろえて「戦争は二度と起こってはいけない」と言います。どのようにすればそれが達成できるでしょうか。

永井隆さんが大事にしていた「如己愛人—己の如く人を愛する—」という言葉がヒントになるのではないかと思います。永井隆さんは、被爆者の小学生の作文を一冊にまとめて出版し、その売り上げを寄付していました。そばにいる人を自分のように愛し、大切に作るキリスト教が広まっている長崎ならではの心を学び、私がそれをより広げていきたいと思っています。

さらに言えば、その愛を「許す」という行動に表すことができたらいいのではないかと思います。昨今、SNS やマスメディアが普及し、何か1つ問題が起これば不特定多数の誹謗中傷を受ける、いわゆる「炎上する」「叩かれる」という状況になります。もちろん、問題を引き起こしてしまった人はそれ相応の罰や反省を求められますが、それを周囲の人が追い込むのではなく立ち直るきっかけを「許し」を通して与えることも必要ではないかと思います。他人から許された人は、他人を許せるようになると信じています。

私自身がまず、人を許すことを大事にし、実践していきたいと思っています。影響力は小さいかもしれませんが、“許しの連鎖”を生み出すきっかけになりたいです。

結びに、今回の長崎派遣で最も嬉しかったことは、9人の中高生がとても意欲的に原爆について学び、平和について考えていたことです。原爆資料館や各史跡でのめり込むように話を聞き、展示品に集中している姿に心を打たれました。戦争について関心を持つことが平和を考える大切な一歩だと思います。彼らならきっと、自分なりの「平和」を考え、実行してくれるだろうと思います。彼らに負けないよう、私も日々精進してまいります。

「平和」とは

習志野市立第一中学校 3年 土岐光喜

2日間の派遣の中で、長崎原爆資料館をはじめ多くの原爆関連施設を見学することが出来ました。特に印象に残っているのは、長崎原爆資料館で見た、爆心地からほど近いところで無惨に転がっていたご遺体です。もはや誰かさえわからないほど、真っ黒に焼けて炭のようになってしまったその生々しい写真から、原爆の恐ろしさと、人の尊厳が奪われることに悲しく、やるせなく感じました。

「人が人でなく」なってしまった8月9日、8月6日のあの出来事は決して忘れてはいけないと強く思いました。

私がこの派遣を通して知った、最も傷ついた事実は、人が人を殺すことが戦争の中で合法となり、その行為が賞賛さえされる場合があるということです。ひとたび戦争が起これば、人々は理性を失って、人を殺めることへの抵抗が麻痺していき、その行為を厭わなくなります。罪のない人々を巻き込み、人のみならずあらゆる生物の命を奪います。戦争は、天災ではなく、人災です。ボタンを押すのはいつでも私たち、人間です。

世界中の人々は、有史以来ずっと「平和」を望んでいます。私たちは、その意味をよく理解しないままに「平和」という言葉を使います。「平和」とは何でしょうか。戦争のないことが平和なのでしょうか。日本は、「平和」主義を謳っています。80年前、現憲法が制定されたときの「平和」と現在の「平和」は、同じなのでしょうか。今の日本は、はたして「平和」なのでしょうか。では、世界は？

答えはないのかもしれませんが、でも、これからもずっと考えていく必要があります。戦争のない世界は望むものではなく、つくるものです。自分に出来ることを考えて、行動していきたいと思えます。

最後に、台風で派遣再考を余儀なくされたなか、調整にご尽力くださった関係者のみなさま、ありがとうございました。



長崎派遣を終えて

習志野市立第二中学校 3年 佐々木耀久

今回の長崎派遣は、私に「平和」とは何か、そして、戦争の恐ろしさを考える機会を与えてくださいました。「長崎原爆資料館」など、原爆に関する場所、物が、戦争の恐ろしさ、悲惨さを肌から伝わるような感覚がするほどでした。そして、これらの場所、物全て1つの原子爆弾によって生まれてしまったと考えると、この出来事はただ過去にあったことで終わらせてしまうのではなく、現在を生きる私たちも、「平和」に繋がる活動をするべきだと思いました。

今もこの世界では内戦や戦争が続いています。私たちの何気ない生活が当たり前ではない人々が沢山いるのです。私たちにできる「平和」への活動はとても微力かもしれませんが、“核兵器のない平和な世界”を目指すには自分たちの小さな力が少しずつ世界を変えていき私たちの目指す「平和」があると感じました。同じ地球を生きる地球市民として、微力ではありますが平和への活動を続けていきたいです。

最後に、平和市民代表団の派遣、そしてその準備にご尽力して下さった皆さま、ありがとうございました。

平和への扉

習志野市立第三中学校 3年 木村悠成

僕が見たナガサキでの光景は写真や動画、そして言葉では言い表すことのできないものでした。特に原爆資料館にあった、曲がった鉄筋コンクリートや木材、原子爆弾の光による人や物の影、高温により沸騰してしまったガラスの瓶など想像できないものばかりがそこにはありました。

1個の爆弾ですべてを焼き尽くした恐怖は想像しきれません。当時、どんな戦況だったとしても罪のない一般市民を殺すのは許せないことだと思います。再びこのようなことが起きないように核は廃絶していくことが大事だと思いました。「人の手」によって作られ、「人の上」に落とされた原爆をなくすことができるのも、「人の意思」だと僕は思います。

しかし、今も世界には13,000発ほどの核兵器が存在します。その中でも、ロシアやアメリカが全体の9割を占めています。この2つの超大国が核兵器を手放さない限り、この地球上から核兵器はなくならないと思います。この2つの国が核廃絶をするよう「長崎を最後の被爆国に」という言葉のもと、これからも訴えていきたいと思っています。

終戦から78年がたった今、被爆者の平均年齢は85歳を超え、その数も減少しています。それに伴って、戦争の実情について語る方々も少なくなってきました。今こそ、僕たち若い世代が被爆者の意思を受け継ぎ、継承していくことがとても重要だと思いました。



派遣を終えて

習志野市立第四中学校 3年 川向羽菜

今回の長崎派遣で、実際に原子爆弾が落ちた場所やそれによって壊れて倒れているものなど多くのものを目にしました。私は習志野市平和市民代表団になる前、「戦争」や「原爆」とはどのようなものだったのか、体験した人達が目の当たりにした光景、感じた思い、その後の生活など分かったつもりでいました。

しかし原爆や戦争のことについて多くのひとの話や映像、写真などの資料を見て学習したことで学校で受ける授業とは全く別の目線に立って「歴史」としての原爆ではなく「事実」としての原爆を目の当たりにする事で知ることが出来たと思います。

長崎には街中にも防空壕が残っていました。他にも原爆や戦争のあとが多くありその全てが戦争とはどのようなものなのかを物語っていました。

この派遣に参加する事がなかったら私も知らないことばかりで、この先知らないまま生きていたかもしれません。この経験を出来たことで当たり前の幸せや日常に気がつく事もできましたし、知ることでもう二度とあの悲劇が起こらないようにと思うことが出来ました。私はこの経験を原爆を体験していないからこそ、伝えられる伝え方で周りに広げ、これから先も平和とは何かを考えて行こうと思いました。

派遣を終えて

習志野市立第五中学校 3年 豊沢咲奈

習志野市平和市民代表団としてのこの経験は、私の戦争や平和に対する考えを改めるきっかけになりました。実際に長崎を訪れて、見たこと・聞いたこと・感じたことは事前調べでは知ることができないものばかりでした。

その中で印象に残っているのは、原爆爆心地と原爆資料館の検視調書謄本と死亡診断書です。78年前のこの場所で今では想像ができないほどの惨劇を引き起こす原爆が落とされたのだと思うととても心が痛かったです。また、一瞬にして奪われた家族の暮らしがよくわかりました。

今を生きる私たちは、戦争の惨禍を知る機会はそう多くはありません。だからこそ、私たち市民代表団が先陣を切って活動するべきだと思っています。平和の対義語は戦争なのでしょうか。私は違うと思います。本当の平和とは何なのか追求しながら活動していきたいです。

長崎と核兵器の爪痕

習志野市立第六中学校 3年 古屋陽輝

1. 浦上天主堂

禁教令が解かれた後に、信徒達が強い思いを持って建てたキリスト教の教会。原子爆弾によって完全に破壊されてしまったが、マリア像が奇跡的に残るなど、長崎を象徴する建造物だとわかった。

2. 山里小学校

爆心地から 600mの位置にある小学校で、原爆によって建物は崩壊し、全校生徒の内 8 割が亡くなりました。その事例から作られた「あの子」の歌は現在でも忘れられることなくあり続けています。

3. 原爆資料館

原子爆弾の作られた経緯や威力のことについて触れることができた。また、後遺症など、核兵器の恐ろしさが身に染みてわかった。

<感想>

長崎に落とされた原爆は多くの人の命を奪い、たくさんの人をどん底におとし入れたものだとわかった。私は、もう二度と核兵器を使うべきではないと感じました。

〈長崎派遣を通して〉

習志野市立第七中学校 3年 恩田智己

〈三菱兵器住吉トンネル工場〉

私達は初めに三菱兵器住吉トンネル工場を訪れました。

中はとても暗くよく見る事ができませんでした。このトンネルは当時中学生が作ったのだと知り、自分が当時生きていたらトンネルを掘っていたとは思えられませんでした。トンネルなので暑いと思ったのですが涼しかったです。



〈平和公園〉

ここでは爆発当時の地層や平和祈念象を見ました。その中で特に驚いたことは、外国人観光客の方が多く来ていた事です。そのことから、皆が平和を望んでいるのだと思いました。



〈長崎原爆資料館〉

ここでは原爆による被害や、被爆者の思いを聞きました。当時の写真、けがや後遺症などによる被害、被爆体験講話を聞いて、私が思っていたよりも原爆とは、一瞬にしてみてもあった生活を壊してしまう恐ろしいものだを知ることができました。また、被害を受けた人たちが「戦争からは何も生まれない、核と人類は共存出来ない」と言っていて、この悲劇を二度と起こさない強い思いを感じました。

〈まとめ〉

この派遣を通して平和な世界を作るためには、この世界の人たち皆が戦争の悲惨さや、原爆の残酷さを知り、そして一人一人が伝えていくことが大切なのだと思います。また、「戦争からは何も生まれない、核と人類は共存出来ない」のように被害を受けた人たちの思いを伝え続けることも大切だと思います。平和と一言で言ったとしても人それぞれ違うと思います。しかし、戦争などの人が死んでしまうことが平和だとは、誰しもが思わないと思います。なので、平和とは何なのか考え、意見を交換しあうことが大切だとこの派遣を通して思いました。

人と核は共存できない。

千葉県立津田沼高等学校 2年 細山雅喜

私は今回の長崎派遣を通して事前学習で得た知識を遥かに超える情報や史実を学ぶことが出来ました。そしてこの2日間で回った所の特に印象深かった場所や話などをいくつか綴らせていただきます。

1 番初めに訪れた原爆落下中心地には、川に繋がる階段を造るために地面を掘ると当時の地層が見つかりました。そしてそこには原爆によって壊された家の瓦や茶碗などがありました。その光景を目の当たりにし、私はさっきまでコンクリートで舗装されていた道を歩いていたがその下には78年前に起きた悲劇が今でも地層となりしっかりと残されているという事に驚きを覚えました。それと同時に忘れてはならないと強く思いました。

浦上天主堂は事前学習の中で自分の学習する担当だったのでより深く知識があるつもりでしたが、実際に訪れてみるとそこには教会やステンドガラスの美しさがあり思わず見とれてしまいました。しかしその美しさの背景には原爆でほとんど原型を留めなかった教会を、神父や信徒たちによって当時のまま再建したと思うとよりその魅力に惹かれました。また浦上天主堂には様々な形の像があり、どれも不思議に思える形でした。しかしそれには理由があり、当時再建の指示を出していたのはフランスの神父だったようでライオンや天使の認識が日本人とかなり異なっていたため、今では違和感のある形になっているそうです。

2 日目になり長崎原爆資料館を訪れました。そこには原爆投下までの経緯や遺品、被爆資料(写真や映像)、核兵器の歴史などの貴重な財産がありました。また、78年前に長崎で被爆された方から1時間半程の講話を聞かせて頂きました。実際に原爆の恐怖を経験してない身としても、話を聞いているだけで背筋が凍るような映像が頭の中で流れ、仮に当時自分がその立場だったらと考えると生き残れただけで奇跡なのに、今もこうして当時の事を鮮明に記憶し後世に語り継ぐその姿に感銘を受けました。そしてこの先、原爆の惨さを直接知っている方々が少なくなっていく中で私たちがアクションを起こして原爆を知らない世代へ78年前に何があったのかを伝えていく責任があると思います。

そして最後に、今世界では核兵器が使われていなくても戦争という状況に巻き込まれ、罪のない多くの尊い命が奪われています。それに核兵器が加わってしまったらそれこそ第3次世界大戦になりかねません。そしてそんなことを決して起こしてはいけません。78年前の原爆で多くの死者や負傷者を出し、被爆者に関しては子孫にまで影響を及ぼしています。どんなに言い訳を並べても、これだけは絶対に変わることのない事実であり核を作り、保有し、利用してはいけない最大の理由でもあると考えます。なぜなら、核は自国を防衛するためでも、外交の道具でもなく、決して人の手に届く場所には存在してはいけないものだからです。つまり人と核の共存は不可能なのです。そしてこの考えが世界で当たり前の事として認識されるならそれは平和への大きな一歩であり、その日が来るまでは平和を祈るだけでなく形や行動としてその根拠を幅広い世代へ示していく事が何よりも重要な事だと思います。

長崎派遣報告書

習志野市立習志野高等学校 2年 松尾悠大

◆三菱兵器住吉トンネル工場（跡）について

私たち派遣団が見ることができたのが、6本トンネルがあるうちの1号と2号を見ることができました。トンネルの入り口はコンクリートで固められていましたが、少し奥は岩肌が残っていて当時の工場の雰囲気を知ることができました。



◆平和公園周辺を見学して

◇浦上天主堂

浦上天主堂の近くには、鐘楼が当時のまま残っておりそれを見て50トンもする鐘楼が高いとこから落ちてしまうほどの当時の状況を写真から想像することができました。



◇永井隆記念館

被爆してしまっても自分のことだけではなく周りの人の治療を優先とする永井隆の人物像を改めて知ることができました。また如己堂が2畳しかないというのは知っていたけれど実際に見てみると想像よりも小さかったです。

◇平和公園

爆心地の近くには当時の地層を見ることができました。その地層を見ることで改めて当時の悲惨な状況を知ることができました。また平和公園にある平和祈念像は想像よりも大きく驚きました。



◆原爆資料館について

実際に触ることのできた瓦があり、現地でしかわからないことを肌で感じることができました。また溶けてくっついた硬貨などがあり瞬間的な高熱を受けたことを実際に見て知ることができました。



◆これからの生活に活かせること

現地に行くことでしか学ぶことのできないことを学ぶことができたので、まずそれを私たちの身の周りの人に発信していければと思います。学校で説明したり、部活で説明したり、家族や周りの友達に説明したりしていければいいなと思っています。そしてこれからも戦争を二度と繰り返すことのないように私自身も頭にずっと核のことを忘れないようにしていきたいと思っています。

「平和な未来をつくるために、私たちはなにができるのか？」

～団員に事前学習会と派遣報告会でそれぞれ考えてもらいました～

派 遣 前

- 平和について学ぶこと
- 原爆の非人道性や平和を守る大切さを伝える
- 長崎派遣で学んだことを伝える
- 被爆者の話を後世へ伝える
- 戦争反対、核兵器廃絶を訴える
- 自分事として考え、啓蒙すること
- 平和への意識が高くなる活動をする
- 他人の意見を認め尊重する
- 核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さを話していく
- いろいろな国の人と関わりを持つこと
- 平和ではなかった理由を学び、繰り返さない
- 傾聴力を身につけ、歩み寄る
- 偏見や無知を減らすこと
- 自分の力や時間を使い、ボランティアや募金の活動を行うこと



派 遣 後

- 戦争について実際に起きたことから目をそらさずに深く学ぶ
- 小さな喧嘩から国際問題まで幅広く目を向け知る
- 目を背けずに実情を伝える
- 身近なところで平和はあることを伝える
- 実際に自分の目で見て感じ、昔何があったのかを知り、周りの人や後世に伝える
- SNSやインターネットや講話などで伝える
- 原爆の被害や当時の人々の思いを知り、伝える
- 平和とは何なのか一人ひとりが考え、自分の思いと共に伝える
- 相手の気持ちを汲み取り考えを尊重し、人を許す
- 投票権を得たら政治に参加する
- 平和の活動を若い人が引き継ぐ
- 自分なりの「平和」を見つける
- 偏見を持たない
- 人として「自立」すること
- 足るを知ること
- 学校や日本だけではなく世界に発信する
- 毎年生徒会から生徒へ「平和」の呼びかけをする
- 自分達の感じたことを行動でも示していく
- 一人ひとりの生きる権利を大切に生活する
- 柔軟に他人の考えも受け入れられる思いやり
- 学校などの身近なところで考える機会を作る
- 長崎が最後の被爆地となるように核兵器廃絶を言い続ける
- 現金のみならず多様な形での募金活動
- 小さい子どもにも話していく

派遣前は、自分達にできることを大きい括りの中で話すことが多かった印象でしたが、派遣後は、実際に現地へ赴き見て感じた実情を世界に伝えるにはどうしたらいいのかなどより深い意見がたくさん出てきました。

自分ができることをまずは身近なところから始めたいという意見も出て、より具体的な話し合いになりました。

習志野市に帰ってきてから、学んだことについて話し合い、模造紙にまとめました。



土岐・豊沢団員によるまとめ

被爆体験講話 を受けて

〈プロフィール〉
池田道明 さん
 ○被爆当時：6歳
 ○爆心地から700mの大学病院で被爆



〈証言内容〉

池田さんは爆心地から700mの大学病院で被爆されました。池田さんご自身は、奇跡的にけがも後遺症もなが、たのですが被爆後の町で、目玉が頬まで落ちた人や前に伸ばした腕が皮膚が垂れ下がった状態の人々が列をなして彷徨い歩く様子を見たそうです。

ご自身の体験から、池田さんはこう語ってくださいました。「戦争は、人格を変えてしまうんです。勝った国にも負けた国にも被害はあるんです。『平和』は、戦争がないことではないと思うんです。今の水素爆弾は、(長崎に落とされた)原爆の100倍もあるんです。それは、命あるものをすべて奪ってしまってます。それで戦争が終わっても平和が訪れたとはいえないんです。だからこそ、話し合いが『平和』への近道になるんですわ。」

〈感想〉

実際に被爆された方々の話とは生々しく、当時の様子を鮮明に想像することができました。池田さんの平和への思いを伝えていきたいです。

「戦争はいけない」という池田さんの思いがひびきと伝わってきました。自分ができることから始めようと思います。

土岐 豊沢





佐々木・川向・古屋団員

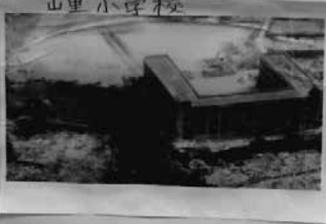
によるまとめ

長崎派之書を終えて

〈フィールドワーク〉

佐々木 耀久
川向 はな
古屋 陽輝

- ・ 浦上天主堂
1895年から建設が始まり30年の歳月かけて1925年に完成したカトリック教会。
1945年に爆心地から800mの位置で被爆。
被爆により建物はほぼ全壊。
約15000人のうち約10000が亡くなった。
- ・ 山里小学校
8月9日、午前11時2分に、爆心地から約600mの位置で被爆し、甚大な被害を受けた。
児童の犠牲者は1300人にものぼり、建物は1階、2階を残すのみで全焼した。
原爆で亡くなった人の霊を慰め、永遠の平和を願うものとして、「あの子らの石卑」が立てられている。





木村・恩田団員によるまとめ

〈長崎原爆資料館
について〉

～場所の説明～

長崎原爆資料館は、長崎市の原爆被爆五十周年記念事業の一つとして、1996年(平成8年)4月にそれまで被爆資料を展示していた長崎国際文化会館を建て替えて開館した。当館では、被爆資料や被爆の惨状を示す写真などの展示をはじめ、原爆が投下されるに至った経過、核兵器開発の歴史、平和追求などのストーリー性のある展示を行っている。

～展示物について～

- ・「永遠の11時2分」
長崎の街が一瞬にして破壊されたことを語る11時2分を指して止まった時計を見ることができる。
- ・「原子野と化した長崎の街」
ここでは、原子爆弾投下後の長崎の街の悲惨さを見ることができる。そこには何もかもが爆風で飛ばされてレンガは崩れ、街が跡形もなくなっていた。また、原爆の被害の大きさや放射線などの被害を知ることもできる。その他にも後遺症などで今も苦しんでいる人についての実態を学ぶことができる。
- ・「原子爆弾について」
 - 1945年8月9日長崎に原子爆弾が落とされた。
 - 死者73,884人 負傷者74,909人
 - 長崎型原爆(ファットマン)
 - 爆発した高さは504メートル付近
 - 爆発時の表面温度3600度から4000度
 - センサーがついていて、上空500メートル付近で爆発するようになっていた。





木村 徳成
恩田 智己

平和市民代表団による報告会

代表団の活動目的の一つは一人でも多くの方に派遣で学んだことを伝えることです。

派遣後、団員達は様々な報告を行いました。

——『平和市民代表団 長崎派遣報告および平和基金募金活動』——

10月29日(日) 福祉ふれあいまつり

習志野市役所で行われた福祉ふれあいまつり会場の一角で、派遣時の写真などをまとめた資料を展示しました。また、ステージイベントにて報告を行いました。



11月11日(土)・12日(日) 食とくらしの祭典

習志野市役所で行われた食とくらしの祭典会場の一角で、派遣時の写真などをまとめた資料を展示し、平和基金募金活動を行うなど、平和啓発に努めました。



《その他団員による発表》

◎土岐団員

9月15日 第一中学校文化祭にて



◎佐々木団員

9月15日 第二中学校文化祭にて



◎豊沢団員

9月15日 第五中学校文化祭にて



◎松尾団員

10月3日 習志野高等学校学年集會にて



◎木村団員

10月16日 第三中学校全校集會にて



◎古屋団員

10月17日 第六中学校全校集會にて



◎細山団員

12月20日 津田沼高等学校学年集會にて



長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

資 料

※今年度は台風6号の長崎県接近に伴い、式典は主催者（長崎市）のみの縮小開催となり、一般参列が不可となったことから派遣団は参列できませんでした。

開 式

原爆死没者名奉納

式 辞

献 水

献 花

黙とう

長崎平和宣言…………… 62ページ

平和への誓い…………… 64ページ

来賓挨拶

閉 式

長崎平和宣言

「突然、背後から虹のような光が目に入り、強烈な爆風で吹き飛ばされ、道路に叩きつけられました。背中に手を当てると、着ていた物は何もなく、ヌルヌルと焼けただれた皮膚がべっとり付いてきました。3年7か月の病院生活、その内の1年9か月は背中一面大火傷のため、うつ伏せのままで死の淵をさまよいました。私の胸は床擦れで骨まで腐りました。今でも胸は深くえぐり取ったようになり、肋骨の間から心臓の動いているのが見えます。」

これは16歳で被爆し、背中に真っ赤な大火傷を負った谷口稜暉(すみてる)さんが語った体験です。

1945年8月9日午前11時2分、長崎の上空で炸裂した1発の原子爆弾により、その年のうちに7万4千人の命が奪われました。生き延びた被爆者も、数年後、数十年後に白血病やがんなどを発症し、放射線の影響による苦しみや不安を今なお抱えています。

谷口さんは6年前にこの世を去りましたが、生前、まさに今の世界を予見したかのような次の言葉を遺しました。

「過去の苦しみなど忘れ去られつつあるようにみえます。私はその忘却を恐れます。忘却が新しい原爆肯定へと流れていくことを恐れます。」

長期化するウクライナ侵攻の中で、ロシアは核兵器による威嚇を続けています。他の核保有国でも核兵器への依存を強める動きや、核戦力を増強する動きが加速し、核戦争の危機が一段と高まっています。

今、私たちに何が必要なのでしょうか。「78年前に原子雲の下で人間に何が起こったのか」という原点に立ち返り、「今、核戦争が始まったら、地球に、人類にどんなことが起きるのか」という根源的な問いに向き合うべきです。

今年5月のG7広島サミットでは、参加各国リーダーがそろって広島平和記念資料館を訪れ、被爆者と面会し、被爆の実相を知ることの重要性を自らの行動で世界に示しました。また、このサミットの成果文書である「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」では、「核戦争に勝者はいない。決して戦ってはならない」ということが再確認されました。

しかし、この広島ビジョンは、核兵器を持つことで自国の安全を守るという「核抑止」を前提としています。核抑止の危うさはロシアだけではありません。核抑止に依存しているのは、核兵器のない世界を実現することはできません。私たちの安全を本当に守るためには、地球上から核兵器をなくすしかないのです。

核保有国と核の傘の下にいる国のリーダーに訴えます。

今こそ、核抑止への依存からの脱却を勇気を持って決断すべきです。人間を中心に据えた安全保障の考えのもと、対決ではなく対話によって核兵器廃絶への道を着実に歩むよう求めます。

日本政府と国会議員に訴えます。

唯一の戦争被爆国の行動を世界が見つめています。核兵器廃絶への決意を明確に示すために、核兵器禁止条約の第2回締約国会議にオブザーバー参加し、一日も早く条約に署名・批准してください。そして、憲法の平和の理念を堅持するとともに、朝鮮半島の非核化、北東アジア非核兵器地帯構想など、この地域の軍縮と緊張緩和に向けた外交努力を求めます。

地球に生きるすべての皆さん、一度立ち止まって、考えてみてください。

被爆者は、思い出すのも辛い自らの被爆体験を語ることで、核兵器がいかに非人道的な兵器であるのかを世界に訴え続けてきました。この訴えこそが、78 年間、核兵器を使わせなかった「抑止力」となってきたのではないのでしょうか。

その被爆者の平均年齢は、今年 85 歳を超えました。被爆者がいなくなる時代を迎えようとしている中、この本当の意味での「抑止力」をこれからも持ち続けられるか、そして核兵器を廃絶できるかは、私たち一人ひとりの行動にかかっています。

被爆地を訪れ、核兵器による結末を自分の目を見て、感じてください。そして、世界中で語り継ぐべき人類共通の遺産ともいえる被爆者の体験に耳を傾けてください。

被爆の実相を知ることが、核兵器のない世界への出発点であり、世界を変えていく原動力にもなり得るのです。

私は、両親ともに被爆者である被爆二世です。「長崎を最後の被爆地に」するため、私を含めた次の世代が被爆者の思いをしっかりと受け継ぎ、平和のバトンを未来につないでいきます。

日本政府には、被爆者援護のさらなる充実と一日も早い被爆体験者の救済を強く求めます。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げるとともに、長崎は、広島、沖縄、そして放射能の被害を受けた福島をはじめ、平和を希求するすべての人々と連帯し、「平和の文化」を世界中に広め、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

令和5年8月9日

長崎市長 鈴木史朗



平和への誓い

78年前の8月9日、7才の私は爆心地から約3キロの片淵町の自宅で母や姉、弟2人の5人で食卓を囲んでいました。突然、強烈な閃光が走り、皆一斉に庭先の防空壕に駆け込んだ次の瞬間、地響きのような音がして私は母にしがみつきました。しばらくして壕を出てみると、縁側のガラス戸は跡形もなく壊れ、畳は跳ね上がり、食卓はひっくり返っていました。

その後、勤務先の造船所から帰宅した父は、爆心地に近い城山町の叔父の家に行き、二人の遺体を探し出し、焼け跡で茶毘に付しました。書斎の瓦礫の下にあった叔父の遺体も台所でみつかった叔母の遺体も無残に焼けていたそうです。

原爆投下直後、私たち家族は無事でしたが、被爆から10年余り経ち、次第に体調を崩していった父は肝臓がんと診断され、3か月程の闘病の末、亡くなりました。臨終の時、父の顔に酸素マスクを当てていた私は、「神様、私の家族をお守りください」という最期の言葉を聞き、涙が止まりませんでした。その後、母と姉、弟、そして被爆時、母の胎内にいた妹までもが、相次いでがんで亡くなりました。私自身も3年前、肺がんの手術を受けました。たった一発の原爆で、長崎ではおよそ7万4千人、広島では14万人が亡くなり、生き残った人々の多くも、今なお、様々な後遺症に苦しんでいます。

世界には、長崎や広島で使われた原爆の威力を大きく上回る核弾頭が約1万2千5百発存在し、ロシアのウクライナ侵略による緊迫した国際情勢の中、この美しい地球は、核兵器によって破壊され汚染される危機にさらされています。核戦争を起こさないために、唯一の戦争被爆国である日本は、今こそ広く世界に核兵器の非人道性を伝え、武力に拠らない平和創造の道筋を指し示し、地球と人類の未来を守るには、核兵器廃絶しかないと強く訴えるべきです。

私は、今から15年前の2008年の秋から4か月間、「第63回ピースボート地球一周の船旅」に参加し、船で世界一周をしながら自らの被爆体験を証言しました。そのとき同乗されていたカナダ在住のサーロー節子さんの力強い言動に鼓舞され、帰国後に被爆者団体の理事として様々な活動を始めました。

現在は、小学校などの平和学習の場で、被爆二世の方々と製作した紙芝居を使い、被爆体験の証言活動に取り組んでいます。これは長崎に原爆が投下された後、救援列車第一号に乗り込み、救護活動にあたった当時20歳の男性の体験をもとに製作したものです。紙芝居を見る純真な子どもたちの姿にふれるたび、私はこの子どもたちが戦争に巻き込まれ、私たちと同じ苦しみに遭うようなことがあってはならないと強く感じています。

今、我が国には、被爆者の願いをしっかりと受け止め、核兵器廃絶と平和な世界の实

現に向けて活動を続けている高校生がいます。高校生平和大使、高校生1万人署名活動をしている若者たちです。さらに私の住む熊本県では高校生が「ヒロシマ・ナガサキピースメッセンジャー・平和の種まきプロジェクト」と題して、同世代や下の世代に向けた平和学習の出前授業も行っています。

その若者たちの姿に勇気づけられ、私は未来への希望の光を感じています。放射能に汚染された灰色の世界ではなく、命輝く青い地球を次の世代に残すために、これからも力の限り、尽くしていくことを誓います。

令和5年8月9日

被爆者代表 工藤 武子



参考資料



習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典

習志野市では、毎年8月6日、9日の原爆投下時刻に合わせて下記のとおり『原爆死没者慰霊および平和祈念式典』を新習志野公民館並びに秋津公園内「平和の広場」で実施しています。

その式典の中で、習志野市平和市民代表団OB・OGによるスピーチ及び平和の詩の朗読を行っています。(全文を次ページ以降に掲載)

現地を訪れた当時の思いは、今も習志野市平和市民代表団OB・OGの胸の中に強く残り、戦後世代の平和継承者として、より多くの方々に戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを語り継いでいく活動を続けています。

※どなたでもご参加いただけます

- 黙とう(原爆投下時刻、全市域一斉)
- 習志野市平和市民代表団OB・OGによる平和への思いのスピーチ、平和の詩の朗読
- 花輪、千羽鶴の献納(市長、議長、被爆者の会、市民代表ほか団体・個人受付可)
- 習志野市原爆被爆者の会による献水
- 参列者全員による「広島」「長崎」モニュメントへの献花 … など、30分程度

日 時

- ★広 島★ 毎年8月6日午前 8時13分～<原爆投下時刻 8時15分 黙とう>
- ★長 崎★ 毎年8月9日午前11時00分～<原爆投下時刻 11時02分 黙とう>

場 所

- ★新習志野公民館 2階 多目的室(式典)
- ★秋津公園内「平和の広場」(献花・千羽鶴の献納)



令和5年8月6日

習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典によせて

—平和祈念のスピーチ—

令和4年度平和市民代表団(広島派遣)団員 小林 大斗

私が習志野市の平和市民代表団として広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に出席してからはや一年が過ぎました。私は広島で、78年前の凄惨たる出来事をこの目にしっかりと焼き付けてから習志野に帰ってきました。黒焦げになった服や三輪車、わずかにのみ原型をとどめて現存している原爆ドーム…これはすべてヒロシマの現実であったのです。一発の原子爆弾は、当時の14万人もの人々の未来を奪いました。当時のヒロシマを端的に表現するなら、「生き地獄」という言葉が最良だと考えます。

思い返してみればこの一年、ロシアによるウクライナ侵攻はまったくといっていいほど収まる気配がなく、この瞬間にも海の向こうの大陸では住居にミサイルが降ってきています。これでは原爆がミサイルにかわっただけであって、ウクライナの人々はいまなお兵器におびえています。メディアの発達により、このような現状が即座に世界中に伝播するようになった現代において、私たち日本人の中には、いかに平和慣れしていたか、ということを実感した人々も多くいたと思われまます。最近では、防衛のために核を日本に配備するべきだという主張も見受けられます。しかし皆さん、私たちが本当に求めているのは核ではなく、ありふれた日常なのではありませんか。人間の中には、権力を握るや否やその権力や利害関係にしがみついても者も一定数存在するのです。このような人間がいる以上、いつか将来、配備された核は恣意的に使われかねません。そのうえ、その際に犠牲になるのはいつも何の罪もない市民。少なくとも私は、いつ大切な人を核や戦争で失ってしまうかわからない、そんな不安で押しつぶされそうな社会を生きたいとは思いません。

核という兵器は人間を掌握するには最も手っ取り早い手段の一つと言えるでしょう。がしかし、ボタンを押すだけで地球の滅亡は確実に加速します。人間の手の届く範囲にそんなボタンがあってはならないのです。私たちは、世界で唯一の被爆国の国民として、被爆者の意を継ぎ、核廃絶に向けて動き出さなければいけません。

最後になりますが、原爆により亡くなられた多くの方々に追悼の意を表し、私のスピーチとさせていただきます。



令和5年8月6日

習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典によせて

—平和祈念の詩—

令和4年度平和市民代表団(広島派遣)団員 田辺 彩夏

(代読 令和4年度平和市民代表団 団長 岡田 千砂子)

平和の詩

知らなければならない 認め合う大切さを
知らなければならない 寄り添うことでつながる平和を
知らなければならない 78年前に何が起こったのかを
知らなければならない 今の私たちに何が出来るのかを

繰り返してはならない あの日のことを
忘れてはならない あの日のことを



令和4年度広島派遣時の写真

令和5年8月9日

習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典によせて

—平和祈念のスピーチ—

令和元年度 平和市民代表団(長崎派遣) 団員 平井 将貴

私は4年前、習志野市平和市民代表団として、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列しました。

長崎では、当時のまま残っていた資料や被爆者の講話を見たり聞いたりしました。長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典では、千羽鶴を献納しました。原爆資料館では、悲惨な記録が残っていました。また、青少年ピースフォーラムでは、年齢の近い人達と貴重な意見交換を行いました。

これらの体験を通して、一瞬のうちに町をすべて焼きつくしてしまう原爆の恐ろしさを実感しました。長崎派遣を通して、原爆の恐ろしさ、そして平和の重要性を強く認識することができました。

長崎の原爆投下から月日が流れ、当時の様子を知る者は少なくなってきています。このような悲惨な事件が二度と起きることがないように、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向けて、私たちが後世へ伝えていくことが大切です。このスピーチをきっかけに平和について考えるきっかけになってほしいと思います。

最後になりますが、亡くなられた多くの方々に追悼の意を表し、私のスピーチとさせていただきます。



令和5年8月9日

習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典によせて

— 平和祈念の詩 —

令和元年度平和市民代表団(長崎派遣)団員 渡辺 豪士

記憶の継承

時間の流れは非常に残酷で 被爆者の高齢化は進み続ける

記憶よりも記録から知ることが多くなっている現在に

どれだけの人が後世に伝承できるのだろうか

決して他人事ではない 決して忘れてはならない

願うだけでは平和は訪れない

まだ間に合う 自分にできることを探そう

当時の惨劇を知るものがいなくなってしまう前に



一 習志野市平和市民代表団OB・OGの活動 一

★秋津公園内「平和の広場」の清掃活動★

毎年、習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典の会場である「平和の広場」の清掃活動を、有志の市民の方と一緒にしています。

清掃活動は、どなたでもご参加いただけます。広報習志野にて詳細をお知らせしています。(令和5年度は広報習志野7月1日号に掲載)

○日 時: 7月下旬(令和5年度は7月25日(火)に実施)

午前9時30分～(1時間程度)

○場 所: 秋津公園内「平和の広場」(新習志野公民館脇)



清掃後は交流会が行われ、令和5年度の平和市民代表団員たちはOB・OGからアドバイスをもらいました。

★習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典での平和スピーチ・詩の朗読★

毎年8月6日、9日に実施されている平和祈念式典の中で、OB・OGによるスピーチ・詩の朗読を行っています。

戦後世代の平和継承者として、式典に参列された市民の方々へ、被爆地へ実際に赴いた体験を生かし、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを訴え、より多くの方々の平和に対する意識の啓発を担っていこうとするものです。※令和5年度のスピーチの内容は、68～71ページをご覧ください。

＊「習志野市平和基金」募金活動＊

市で開催される各種行事の会場で、習志野市平和基金の募金活動を行っています。
今後も平和活動の一端として継続して実施していきます。

○主な行事(日付は令和5年度実績)

- ・8月6日、9日
「習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典」
- ・10月29日
「福祉ふれあいまつり」
- ・11月11日、12日
「食とくらしの祭典」



募金活動に併せて、令和5年度長崎派遣の様子を展示しました。



平和基金のPRのため、令和5年度
平和市民代表団がポケットティッ
シュのデザインと標語を考えました。

<標語>

争いが生むことは何一つない

＊平和交流会への参加＊

毎年、その年の平和市民代表団員とともに、OB・OGが集い交流を深めています。
派遣報告を含め、今後の平和活動や交流会行事のアイデア、近況報告などの情報交
換を行っています。※令和5年度は令和6年3月に開催予定です。

※OB・OGの皆さんの平和事業へのご協力をお待ちしています。
ご協力いただける方は、事務局へご連絡ください。

事務局：習志野市役所 協働経済部 協働政策課
TEL:047(453)9301 FAX:047(453)5578
Eメール:kyodo@city.narashino.lg.jp

習志野市平和事業のあゆみ

核兵器廃絶平和都市宣言 昭和57年8月5日

第二次世界大戦の終結後、核兵器の威力は列強の注目するところとなりました。米ソの冷戦に端を発して、核兵器の開発や核軍拡競争が次第に激しくなり、世界中の人々が核戦争への危機感を高め、反戦反核運動が広がりました。日本においても全国的に運動が広がり、昭和57年には各地で「核兵器完全禁止と軍縮に関する陳情」が出され、市町村の「核兵器廃絶・平和の宣言」として実を結びました。

本市では、昭和57年8月5日、県内で初めて、平和の実現は市民生活の最も基本的な基盤であるとして、議会の承認を経て宣言しました。

原爆死没者慰霊および平和祈念式典 昭和57年～

「核兵器廃絶平和都市宣言」を契機に、毎年8月6日、9日の広島・長崎原爆投下時刻に、防災行政無線により市民に呼びかけ、原爆犠牲者を追悼し世界平和を願って黙とうを捧げています。

昭和63年に、秋津公園内「平和の広場」で、市の主催による平和を祈念する式典を挙げて以降、毎年、たくさんの市民が集まり、黙とうと献花を行ないます。捧げられた千羽鶴は、広島市あるいは長崎市へ派遣される平和市民代表団へ託し、被爆地の祈念像等に献納しています。平成22年から、習志野市原爆被爆者の会に献水をお願いしています。また、令和4年度から新習志野公民館2階多目的室にて式典(黙とう、スピーチ等)を行なった後、秋津公園内「平和の広場」へ移動し献花・献水・千羽鶴の献納を行う形へと変更いたしました。

平和映画会・講演会等の開催 昭和57年～平成13年

平和思想の土台となる「豊かな心」を培い、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを次の世代に伝えていくことを目的に、映画会を開催しました。また、市制施行や核兵器廃絶平和都市宣言の周年記念事業として、反戦反核、国際貢献などをテーマとした講演会やコンサートなども開催しました。

核兵器廃絶平和都市宣言記念展・核関係図書コーナーの開設 昭和57年～



毎年、核兵器廃絶平和都市宣言日の前後に、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを次の世代に伝えるとともに、平和について考える機会を提供するため、市内の公民館・図書館等で原爆写真・被爆者の描いた絵や市内の絵手紙サークルの皆さんが平和を想い描いた絵手紙、平和への願いを込めて作成していただいた千羽鶴等を展示しています。

平和祈念標語コンクール 昭和61年

市内の小・中学生、高校生から、核兵器の廃絶と平和をテーマとした標語を募集し、寄せられた741点の作品から、15点が市長賞などに選ばれました。市長賞の作品は、市役所やJR津田沼駅前に掲げられ、人々に平和の尊さを呼びかけました。

平和の広場の整備 昭和62年～

秋津公園の一角に、平和ゾーンが造られ、昭和63年3月に旧広島市庁舎の被爆壁を組み込んだモニュメントが設置されました。平成元年7月には、長崎市立山里小学校校舎の被爆壁のモニュメントが併設されました。また、平成2年7月には、広場の表示を兼ねた「核兵器廃絶平和宣言都市」の文字塔を広場の入り口に設置しました。これらを含めてこの広場は、非核三原則を表す三角形をモチーフにしてデザインされています。周辺には市民の名前や絵などが入ったレンガやタイルがあり、市民の憩いの広場となっています。



広島・長崎原爆写真・被爆者の描いた絵の貸し出し 昭和62年～

広島市平和文化センターから提供された広島・長崎の原爆写真や被爆者の描いた絵を学校や団体に貸し出し、市民による原爆展開催を呼びかけています。

核兵器廃絶平和都市宣言記念塔と宣言文の掲示 平成4年～

宣言10周年を記念して、本市の平和への取り組みを内外にアピールするため、平成4年8月に習志野市の玄関であるJR津田沼駅南口広場に、「核兵器廃絶平和宣言都市」の文字塔を建てました。下部の赤三角は核の脅威を表し、青タワー部分は人類が目指すべき平和への道が上に向かって無限に伸びていこうとする様を表しています。青タワーの下部の折れは、核兵器廃絶への取り組みが10年目の節目であることを表現しています。また、市内の公共施設ロビー等に宣言文を掲示して市民への周知に努めています。

被爆65周年にあたる平成22年には、宣言文が破損し、取り外していた公民館へ再度配布し、全公民館に宣言文を設置しました。



平和ポスターコンクール 平成4年

宣言10周年記念事業として、平和の理念を次世代に引き継ぐため、市内小・中学生を対象にポスターを募集しました。265点の応募作品の中から、19点が市長賞などに選ばれ、市役所・公民館等に展示されました。

平和祈念文集『あしたへの誓い』発行 平成5年

風化しつつある戦争体験を記録し、平和教育に活用することを目的として、市民から寄せられた60編の戦争体験文および小・中学生、高校生64名の平和祈念文を文集にまとめ、市内小学校・中学校・高等学校・大学・図書館等に配布しました。

平和の語り部事業 平成6年～平成7年

市制40周年の平成6年度・戦後50周年の平成7年度の2カ年にわたり、学校教育の中で、戦争体験文集に寄稿した市民から中学生に戦争体験を直接語り継ぎ、平和教育の充実を図りました。

平和基金の創設 平成7年4月1日

戦後50周年記念事業として平和基金を創設しました。平和事業の安定継続を図ることを目的に、市の拠出金(平成11年度まで)と市民からの寄附金を積み立てています。平和を愛する心を大きく育て、次世代に継承していくために平和事業の財源に充てています。

広島市・長崎市へ平和市民代表団派遣 平成7年～

戦後50周年を記念し、市内の中学生、高校生を中心とした市民代表団を被爆地である広島市・長崎市に隔年で派遣し、現地の平和式典に参列することを大きな目的として、次世代の平和の継承者を育てていこうとするものです。本報告書にもあるとおり、戦争を知らない世代が、現地で被爆関連施設の見学や、被爆者の方から直に話を聞く等の体験を通して被爆当時の実相に触れ、その悲惨さを肌で感じ取ることで、今ある平和を大切に、平和のために自分たちに何ができるかを考え、周囲へ、次世代へ彼らの思いを発信しています。

令和5年度末現在	被爆者の会	中学校教員	中学生	高校生	大学教授	計
広島派遣	14	15	38	33	1	101
長崎派遣	16	15	33	31	0	95
計	30	30	71	64	1	196



◀令和4年度平和市民代表団の派遣の様子

核実験抗議文の送付 平成7年6月～

平成7年に、包括的核実験禁止条約(C T B T)成立に向けて、国際的な核軍縮の取り組みが進んでいた中、フランスが核実験の再開を決定したことに對して抗議文を送付しました。以来核実験等を行った国(アメリカ、イギリス、ロシア、インド、中国、パキスタン、フランス、北朝鮮)に対し、市民を代表して各国大使館宛てに抗議文及び実験中止要請文を送付しています。

被爆学生服の展示 平成9年4月～

昭和20年8月6日、広島で被爆し、亡くなられた立本昇さん(当時22歳)が着用していた学生服を、生前は藤崎にお住まいだった立本英機さんより寄贈されました。現在は市役所ロビーに展示しており、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを訴える資料として市民の皆様へ公開しています。



市の平和事業紹介ビデオ、DVDの制作、貸出 平成11年度～

本市の実施している平和活動推進事業を広報番組「なるほど習志野」の特別番組としてJCN船橋習志野とともに制作したものです。内容は、広島・長崎市派遣の平和市民代表団の報告を中心として、本市の平和祈念式典等を紹介、市民の皆様へ平和を訴えました。制作したビデオ、DVDは、学校や平和活動を行う団体、個人へ貸し出しを行っています。図書館でも貸し出ししています。

長崎被爆体験講話 平成15年9月7日

戦争の悲惨さと平和の尊さを多くの市民の方に受け継ぐため、浦安市協力のもと長崎市より被爆体験者を招き、講演会を開催しました。講師には、当時16歳で被爆し、妹と弟を原爆で亡くした、永野悦子氏(長崎平和推進協会継承部会員)を招きました。

被爆2世の苗木植樹式 平成16年8月9日



広島「永遠の木」



長崎「平和の木」

市制施行50周年を記念し、戦争体験を継承し、平和の尊さ、命の大切さを伝えていくために、被爆2世の苗木として広島市よりアオギリを、長崎市よりクスノキを譲り受け、「永遠の平和」を願いそれぞれ「永遠(とわ)の木」「平和の木」と名付け平和の広場に植樹しました。

被爆体験講話 平成17年7月～10月、平成20年度～

戦争体験者が年々少なくなっていく今日、戦争・被爆体験講話を通じて少しでも多くの若い世代に戦争や核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを認識してもらおうと共に、平和意識を育てていくことを目的とし、平成17年に戦後60周年事業として「平和の語りべ」を習志野市原爆被爆者の会会員のご協力により市内中学校7校で生徒及び保護者を対象に実施しました。



平成20年度より「平和を語り継ぐ出前講座」として、小・中学校を中心に毎年実施しています。平成23年度より事業内容をわかりやすくするため、「被爆体験講話」と名称を変更しました。令和5年度は、小・中学校6校にて実施予定です。

平和首長会議への加盟 平成22年6月1日

本市では、戦後65周年という節目であり、平成22年5月にNPT再検討会議が開催され国際的にも核兵器廃絶を求める声がさらに高まっていたこと、また平成21年習志野市議会第4回定例会では「非核三原則の法制化を求める陳情」が全会一致で採択され習志野市民・市議会の核兵器廃絶・平和への関心が高かったことから、平成22年5月12日に加入申請書を提出し、6月1日付で平和市長会議（現在の平和首長会議）へ加盟しました。

平和首長会議とは

昭和57年6月の国連軍縮特別総会において、広島市長が世界の都市を超えて連帯し、共に核兵器廃絶の道を切り開こうと呼びかけ、この趣旨に賛同する世界各国の都市で構成された団体です。平成25年8月には、その活動を市以外の町・村・特別区等へさらに広げていきたいという思いのもと、名称を「平和市長会議」から「平和首長会議」へと変更し、令和6年2月1日現在、166カ国、8,363都市、千葉県内では全54市町村が加盟しています。

被爆体験講話DVDの制作とホームページでの配信 平成25年3月～

平成24年度に「核兵器廃絶平和都市宣言」30周年を記念して、習志野市原爆被爆者の会のご協力により、被爆体験講話を通じて少しでも多くの若い世代に戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを認識してもらうとともに、平和意識を育むことを目的に、被爆体験講話をまとめたDVDを制作しました。完成したDVDは、市内の図書館で貸し出しするほか、習志野市ホームページでも視聴いただけます。

戦後70年記念事業 平成27年7月2日、10月3日

長い年月を経る中で風化していく戦争の記憶。平和であるが故に潜んでいる危険。今後も平和な未来を守り続けていくために、私たちは何をしなければならないのか。

戦後70年を記念して「過去」と「未来」の二つの視点から記念行事を行いました。

【次世代への継承】 7月2日 習志野文化ホール

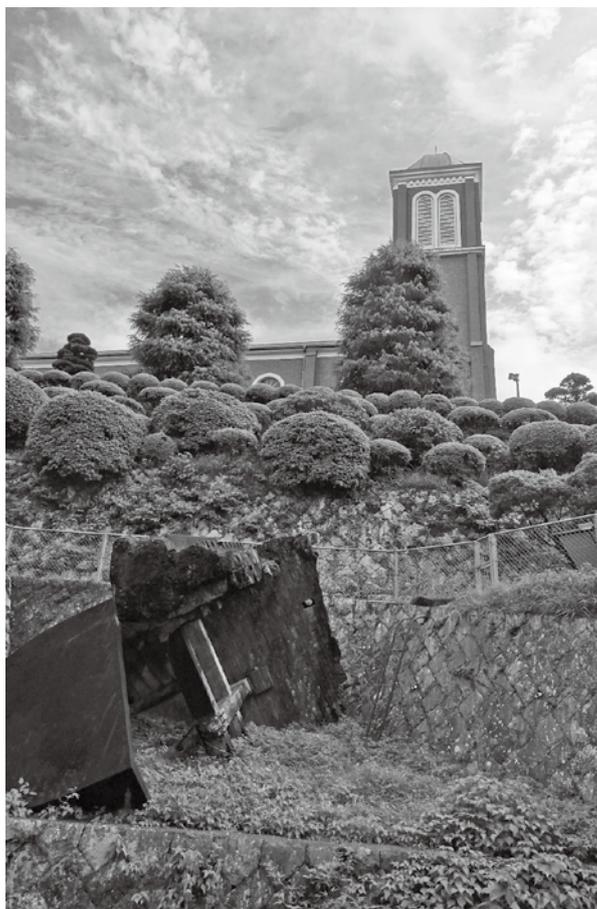
市内全市立中学校一年生を対象に、戦争を知らない若い世代に平和に対する認識を深め、平和の大切さを考えるきっかけとするため、朗読劇「夏の雲は忘れない-ヒロシマ・ナガサキ1945-」を習志野文化ホールで上演しました。

【未来への警鐘】 10月3日 習志野文化ホール

身近な関係性に焦点を当て、読売新聞特別編集委員 橋本五郎氏をお招きし、「家族や地域で語り合う『これからの平和』～無関心社会への警鐘～」をテーマに講演会を開催いたしました。

核兵器廃絶平和都市宣言40周年記念事業 ポスターデザインコンテスト 令和4年

核兵器廃絶平和都市宣言40周年記念事業として、「あなたが願う平和な未来」をテーマに描くことをきっかけに、平和について深く考える機会となるよう市内在住・在学の6歳から18歳を対象としたポスターデザインコンテストを開催いたしました。応募総数114点の中から、12点の作品が市長賞・議長賞・教育長賞に選ばれ、表彰されました。後日、モリシア津田沼2階で展示を行いました。



浦上天主堂と飛ばされた鐘楼

爆心地の北東約500mに位置する浦上天主堂は一部を残して倒壊しました。その際、北側の鐘楼が崖下を流れる小川まで滑落しました。重さ50 t の鐘楼が吹き飛んだ様子から原爆の破壊力が伺えます。

— 令和5年度(戦後78年) —

習志野市平和市民代表団 長崎派遣報告書

未来へ平和を語り継ぐ27

令和6年3月発行

編集 令和5年度習志野市平和市民代表団

発行 習志野市

〒275-8601 習志野市鷺沼2-1-1

電話番号 047(451)1151



「争いが生むことは何一つない」

※デザイン、標語は令和5年度
平和市民代表団が作成しました。